岩手大学大学院連合農学研究科における
教育研究の現状と課題ならびにその改善の方策

第 10 号

（平成 26･27 年度点検評価報告書）

平成 28 年 3 月

岩手大学大学院連合農学研究科

自己点検評価委員会

まえがき

本報告書は、岩手大学連合農学研究科が隔年で発刊している点検評価報告書の第 10 号（平成 26・27 年度）です。

この 2 年間は、前期の末に開催された外部評価委員会の結果も受けて本研究科の教育、研究、管理運営上の諸課題に対応してきた期間に相当します。また、国立大学法人が第 3 期目を迎える第 2 期目の最後の期間で、構成 4 大学それぞれで改組の動きがある中で、連合農学研究科もその将来のあり方を考える機運が高まった時期でもありました。

本研究科では、平成 26 年度に発足した新しいメンバーで構成される点検評価委員会が、3 つの専門委員会（「教育活動専門委員会」、「研究活動専門員会」および「管理運営専門委員会」）を立ち上げ詳細な検討を続けてきました。今期の委員会で取り上げた課題は、基本的には平成 19 年度に本研究科が単位制に移行して以降の大学院教育の実質化に向けた具体的な問題で、学生からの声を反映した授業内容の改善、留学生の入試を円滑にするための配慮の方策、学生の研究活動評価の公平化、学生教育の充実に関連した指導教員に対する予算配分のあり方等、多岐にわたって検討されています。また、平成 27 年度の専攻会議では連合農学研究科の再編についても大きな議論になり、改組についても取り上げられています。本報告書は、上記の課題に関して行われた点検評価の結果とそれを基にした各課題への対応策、改善策が記されています。

2 年間に渡って検討を行った結果、今期の委員会で結論を得たものも多くあります。しかし、次期委員会へ継続審議となっているものや、さらに、本連合農学研究科や博士課程大学院全般を取り巻く状況の変化により、新たに検討すべき課題も現れてきました。それらの要検討課題については、今後も継続して検討を重ねていく必要があります。

博士課程の大学院では、学位の質保証、国際的視点の拡充、社会のニーズに合った人材育成等が引き続き求められていることに変化はありませんが、予算をはじめ厳しい教育環境の中でいかに実質的な博士課程教育を進めるか、引き続き実質的な検討が必要であり、本報告書を、その検討を進める上での 1 つの手がかりとしていただければと思っています。

本報告書の内容について、皆様から忌憚のないご意見、ご助言をいただければ非常にありがたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

自己点検評価委員会委員長　比屋根 哲

目　　次

１．点検評価の実施状況……○
（１）本研究科の主な取り組み……
・研究科教授会、専攻会議の開催
・教育上の主な改善点
・広報編集委員会の活動
（２）点検評価委員会での主な検討事項……
・点検評価委員会の記録（開催日程）
・点検評価委員会委員名簿
２．教育活動専門委員会報告　……○
（１）専攻別特論の開講時期の見直しについて……
（２）教育用資料の改善について……
（３）渡日前入試の実施方法について……
（４）論文の書き方に関するセミナーについて……
３．研究活動専門委員会報告　……○
（１）岩手大学大学院連合農学研究科学生表彰実施要項について……
（２）岩手大学大学院連合農学研究科第一種奨学金返還免除者選考要領について…
（３）教員の主指導、副指導等の選考基準の確認および見直しについて……
４．管理運営専門委員会報告　……○
（１）主指導教員への予算配分の見直し……
（２）専攻・連合講座の再編・連大運営の改革……

５．関連資料

資料１　学位授与状況　……
資料２　標準年限内での学位授与状況　……
資料３　学生数　……
資料４　修了生の就職状況　……
資料５　教員数　……
資料６　ＦＤ講演会資料（平成 28 年 2 月）……
資料７　論文の書き方セミナーアンケート調査結果　……
資料８　講義等アンケート調査結果　……
資料９　修了生アンケート調査結果　……

６．代議員を経験して　……

１．点検評価の実施状況

（１）本研究科の主な取り組み

平成 26･27 年度の連合農学研究科の主な取り組み、制度等の改正点を研究科教授会の議題および報告事項、選考会議の議題等に沿って示せば、以下の通りである。

平成 26 年 2 月　研究科教授会

・モンゴル国立農業大学（現、モンゴル生命科学大学）と部局間協定を締結した。
・代議員は「主指導資格をもつ教授」であることを明記する規則改正を行った。
・デュアル・ディグリー・プログラムの実施に伴う規則改正（入学者選抜実施要項、指導教員の指名についての原則等）について決定した。
・連合農学研究科教員の資格等備えるべき条件の基準および連大担当教員の研究業績評価標準点数を改正した。これにより「備えるべき基準」に「副指導教員では最近の筆頭著者及び責任著者の編数を、主指導教員ではそれに加えて副指導教員に相当する研究指導暦（修士課程学生の指導等）、または研究機関等における教育・研究指導暦を考慮する」の文言が追加され、標準点数の表では、学内紀要、支部会誌等を原著論文からその他の著作物に移動し、国際誌・国内誌の規定をインパクトファクター付英文学術雑誌であるか否かを基準にする等の改正が行われた。
・全国６連合農学研究科の連携協定書を承認し、これまでの実質的な協力関係を協定書として確認した。
・その他、平成 25 年度の外部評価委員会の実施報告が行われた。

平成 26 年 9 月　専攻会議

この会議では、学生教育上の諸課題（教育カリキュラム・学生指導上の課題、英語講義の増加、修士課程教育との連携、専攻別特論のレベル設定等の改善策、学生指導上の課題と改善策等）と連大予算のあり方（教員経費の配分方法等）について、今後代議員会で検討するための意見聴取を行った。

平成 26 年 9 月　研究科教授会

・ダッカ大学との部局間協定の締結を承認した。
・研究科長専攻規則を改正し、研究科長の再任は１回を限度とすることとした。

平成 27 年 2 月　研究科教授会

・学校教育法、国立大学法人法の改正に伴う研究科教授会規則の一部改正が行われ、学長が最終決定を行い、教授会は意見を述べる役割に変更されることになった。
・連合農学研究科規則の一部改正し、専任教員が研究科長になった場合の研究課長補佐の規定が追加された。また、学生が他の研究科の履修科目の単位認定を受ける場合、事前に研究科長の許可を得ることとし、単位認定は博士課程の開講科目に限定した。
・指導教員等の指名についての原則を改正し、第１副指導教員（主指導教員と同じ大学の教員）、第２副の教員（主指導とは異なる大学・機関の教員）指名の原則を明記するとともに、連携大学院の指導教員指名の原則も明記した。
・資格教員審査書類作成上の留意点の文言が改正され、審査書類提出締切以降の業績追加は認めないこと、責任著者であることが論文別刷りに明記されていない場合は、責任著

者であることを示す根拠資料を添付することが明記された。
・学位論文審査等に関する細則を一部改正し、中間発表会の実施時期を学位申請書類提出の１年前から３ヶ月であったところを９ヶ月前から３ヶ月前に変更し、これによって進捗状況報告会と一部期間で重複する不具合を解消した。
・学生への交通費支給基準を一部改正し、配属大学から離れた場所にいる学生の旅費支給に際しても「通学には旅費を支給しない」原則で行うこととした。
・その他の議題として、指導学生が多い主指導教員への予算配分を増額する２つの予算配分案を提示し、4 月の構成大学教員会議で意見交換することを予告した。
・この教授会から、同年度に行われた教員資格審査委員会報告を研究科教授会資料として添付し、説明することにした。

平成 27 年 9 月　専攻会議

この会議では、同年 6 月に岩手大学長から研究科長に帯広畜産大学が第 3 期中に連大から離脱するとの連絡を受けたこともあり、連合農学研究科の再編をどのように進めるべきか、意見交換を行った。また、留学生の受験の配慮として行う渡日前入試について、連大側で提示した案をもとに意見交換し、その必要性を確認した。

平成 27 年 9 月　研究科教授会

・岩手大学の学部長等の選考等に関する規則の一部改正を行い「ただし、連合農学研究科にあっては、連合農学研究科の研究指導を担当する資格を有する岩手大学の専任の教授のうちから選考する」と明記した。
・教授会報告として、連合農学研究科における岩手大学大学院課程研究遂行協力員の推薦基準を制定（H27 年 1 月代議員会決定）し、3 年次後期からは、計画書とは別に主指導教員の署名入りで研究遂行協力審査書の添付を義務付け、優秀な学生に対する経済支援としての制度を実質化するための措置がとられた。
・教授会報告として、研究科長資料経費（学生研究プロジェクト経費）の決定では、選考の客観性を担保することと学生教育の観点から、はじめて研究プレゼンテーションによる面接を行い、書類と面接プレゼンの合計点で代議員等 6 名の審査委員で採点し、候補者を決定するプロセスを採用した。

平成 28 年 2 月　研究科教授会

・教授会報告として、学位論文公表猶予の取り扱いに関する申し合わせ（H28 年 2 月代議員会決定）が周知された。
・学生表彰実施要項の一部改正。IF の評価値の扱いを上限 3 点までとし、平成 28 年 3 月修了者から適応したことが報告された。
・第一種奨学金返還免除候補者選考要項の一部改正を行い、点数を与えるポスター賞を筆頭者のみに限定したことが報告された。

教育上の主な改善点

教育カリキュラム上の改善点として、平成 26 年後期から新たに「研究者倫理」（０単位）を必修化し、日本語と英語の講義を別々に開始したこと。平成 27 年度からは、科学英語Ａ（一般入学者用）、科学英語Ｂ（社会人入学者用）に分けて開講していたものを、履修状況を踏まえて科学英語に統一するとともに、通年 1 単位であったものを半期に同じ講義を 1

回ずつ年２回開講し４つの構成大学で集中講義をメインにしたカリキュラムに変更したこと。受講者の便を考えて平成 27 年度から３つ開講していた専攻別特論の１科目を夏開講から秋開講に移動したこと、等があげられる。

広報編集委員会の活動

平成 27 年度広報編集委員会では、学生ネットワークを形成するために、はじめて在学生を含むワーキングが設置され、その活動の成果として学生相互の情報交換を推進することを目的に、岩手連大公式フェイスブック及び連大学生グループのフェイスブックが立ち上げられた。

連大学生グループ Facebook

岩手連大公式 Facebook

（２）点検評価委員会での主な検討事項

平成 26・27 年度の点検評価委員会は、平成 19 年度に開催された外部評価委員会で審議された課題も引き継ぎ、大学院教育（博士課程）のさらなる実質化に向けて検討することが主要課題とされた。

点検評価委員会は、教育活動専門委員会、研究活動専門委員会、管理運営専門委員会の３つに分かれ、それぞれに委員長を置いて議論が進められ、その成果は全体委員会で検討・確認され、取りまとめられることになった。本報告書は、以上の３つの専門委員会のまとめと関連資料を中心に構成されている。

教育活動専門委員会では、３つの専攻別特論の開講時期、特に講義資料の英文併記等の教育用資料の改善、渡日前入試の実施方法、論文の書き方に関するセミナー実施、等が検討されている。

研究活動専門委員会では、学生表彰基準および第一種奨学金免除候補者推薦基準の見直

しを中心に検討されている。

管理運営専門委員会では、連大教員への経費の配分方法の見直しと、連合農学研究科の再編について検討されている。

連大では、以上の点検評価委員会の検討結果を踏まえ、諸条件を勘案した上で研究科長が代議員会に提案し、具体的な方針を決定していくことにしている。

点検評価委員会の記録（開催日程）

第 1回　平成 26 年 5 月 16 日　弘前大学コラボレーションセンター会議室
第 2回　平成 26 年 7 月 10 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 3回　平成 26 年 9 月 4 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 4回　平成 26 年 10 月 10 日　帯広畜産大学本部会議室
第 5回　平成 26 年 11 月 7 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 6回　平成 27 年 1 月 9 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 7回　平成 27 年 2 月 13 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 8回　平成 27 年 5 月 15 日　山形大学農学部会議室
第 9回　平成 27 年 7 月 9 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 10 回　平成 27 年 9 月 3 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 11 回　平成 27 年 11 月 6 日　鶴岡市近郊施設会議室
第 12 回　平成 28 年 1 月 8 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟
第 13 回　平成 28 年 2 月 19 日　岩手大学大学院連合農学研究科棟

点検評価委員会委員名簿（○は専門委員会委員長）

委員長　上村松生（平成 26 年度）・比屋根哲（平成 27 年度）
副委員長　比屋根哲（平成 26 年度）・築城幹典（平成 27 年度）

１．教育活動専門委員会
○福島道広（帯広畜産大学・資源）　佐藤和憲（岩手大学・環境）
松崎正敏（弘前大学・生産）　豊増知伸（山形大学・資源）
２．研究活動専門委員会
○築城幹典（岩手大学・生産，平成 26 年度）
○倉島栄一（岩手大学・環境，平成 27 年度）　千田嶺生（弘前大学・資源）
日高　智（帯広畜産大学・寒冷圏）　小山浩正（山形大学・環境）
３．管理運営専門委員会
○橋本　勝（弘前大学・資源）　小池正徳（帯広畜産大学・生産）
喜多一美（岩手大学・生産，平成 27 年度）　平　智（山形大学・生産）
倉島栄一（岩手大学・環境，平成 26 年度）

２．教育活動専門委員会報告

（１）　専攻別特論の開講時期の見直しについて

専攻別特論は、生産、資源、環境の分野で３科目（選択・１単位）が開講されているが、開講時期がいずれも７月下旬から８月上旬の夏季に集中している。この間、農業に従事する社会人学生から「この時期は農繁期のため受講が難しいので、開講時期を変更してほしい」との要望が出された。専攻別特論の開講時期については、学生アンケートでも変更を希望する意見がみられた。

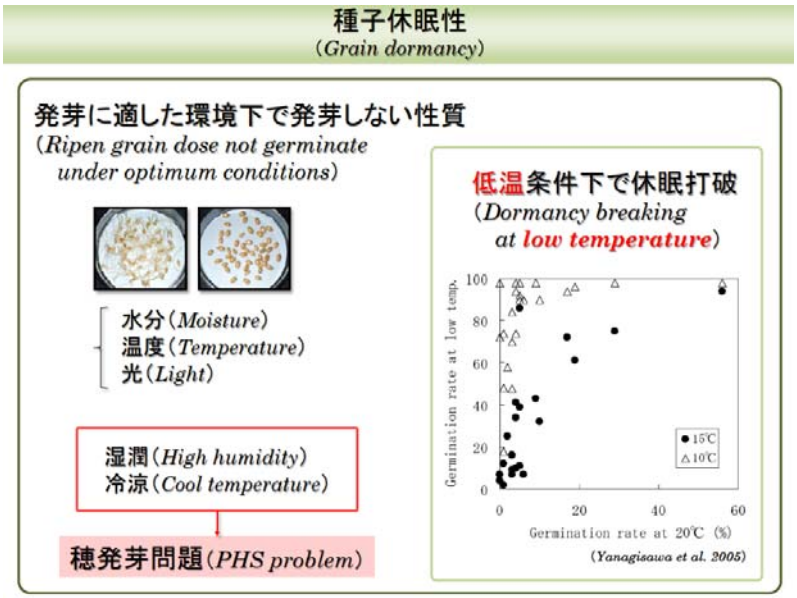
2014 年度は、7 月 22-23 日に生物生産科学特論、7 月 24-25 日の生物資源科学特論、7 月 28-29 日の生物環境科学特論を実施したが、学生アンケートの意見を参考に 2015 年度は､3 つの講義のうちいずれか 1 つを農閑期である 11 月か 12 月に移動することを検討し、それに伴って英語特論についても一部開講期をずらす必要があるとした。2015 年度は、7 月 21 日～24 日に生物生産科学特論と生物資源科学特論（いずれも日本語）を 4 日連続で実施し、生物環境科学特論（英語）は、12 月 14～15 日に実施した。

（２）　教育用資料の改善について

学生アンケートで、とくに留学生から「講義が日本語で行われる。また講義資料も日本語で作成されているため、講義内容を理解することができない」という意見が多く出されていた。

これを受けて、点検評価委員会では講義資料の英文併記などを講師の教員にお願いすることを確認した。また、それに先立ち、科学コミュニケーション（必修・1 単位）で行う講義についても講師に英文併記の講義資料を作成していただくことにした。

今後は日本語で行う専攻別特論についても講義資料に英文併記をお願いしていくこととした。この場合、下図のスライド（帯広畜産大学　森雅彦先生提供）にあるように、スライドおよび図のタイトル、グラフの縦軸と横軸の単位、凡例、その他のキーワードについては、英文を併記していたくことにしたい。



今後は、特論に限らず、その他の日本語で実施する講義についても、講義資料にはこのような英文併記を講師には依頼していく予定である。なお、英語のみの表記による講義資料は、日本語で実施する講義でもそのまま使用して差し支えない。

（３）　渡日前入試の実施方法について

研究者交流と協定の締結でダッカ大学（バングラディッシュ）を訪問した際、ダッカ大学側から、岩手連大の入学希望者が入試の際に渡日し、いったん帰国してから就学のため再度渡日するのは経済的に大きな負担になることから、留学生への配慮として渡日前に入試ができないかが検討課題であった。

これを受けて点検評価委員会では、いわゆる渡日前入試のあり方、方法について以下のような案を作成し、内容を検討した。

岩手連大入試における渡日前入試の導入について（案）

1.　趣旨

岩手連大では、入学者の選抜及び進学者の選考は、口頭試問、成績証明書及びその他必要と認める資料を総合して判定している。口頭試問は現在、岩手大学会場にて受験生を集めて行われるため、留学生の志願者で、かつ、日本に居住していない者については、試験日に合わせて来日していることが現状である。

近年、日本に居住していない受験生が増加しており（平成 26 年 10 月入学 2 名，平成 27 年 4 月入学 1 名）、複数の連大資格教員から受験生を対象にした渡日前入試の導入の要望が出されている。

このことに伴い、他連合農学研究科の入試実施状況を調査したところ、渡日前入試を実施している連合農学研究科は岐阜大学、愛媛大学、東京農工大学であった。各大学より提供いただいた情報をもとに、下記の通り岩手連大入試における渡日前入試の導入について考案する。

2.　実施要項

1）募集人員：各専攻若干名（募集定員は持たない）

2）入学時期：4 月又は 10 月（一般・社会人入試と同様）

3）出願手続：一般・社会人入試で受験する志願者が提出する出願書類一式の他に加えて、TOEFL、TOEIC 等の写しを併せて提出させる。

4）面談実施：原則として主指導予定の教員が直近の口頭試問が行われる 1 ヶ月前までに連合農学研究科長の許可により現地に赴き、面談を行う。（予備審査）

5）実施報告：面談を行った主指導予定の教員は、速やかに連合農学研究科長へ報告書を提出する。

6）口頭試問：口頭試問指定日当日は、入試委員が実施報告書の内容を共有し、口頭試問を実施し、実施報告の内容も含め総合して採点を行う。

7）出願資格：海外に在住する出願者で、かつ、経済的理由等により日本での試験に参加することが難しい者。

8）試験実施期間：国によっては時差の問題も発生するため、試験（口頭試問）の実施については、デュアル・ディグリー・プログラム入試の口頭試問の実

施期間と同日程を準用する。

3. 注意事項

1）現地面談については、主指導になり得る教員が受験生本人と確認し、口頭試問実施（開始日）の遅くても 1 ヶ月前までに必ず研究科長へ申請すること。

但し、過去 1 年以内において学会等にて既に面識のある場合については、証明できるもの（国際学会などのプログラム等）の確認により、現地面談に代えることができる。

2）口頭試問実施の 1 週間前までに研究科長への実施報告が無い場合は、電子機器等を用いた口頭試問はできない。

3）面談のための現地への旅費は、主指導になり得る教員経費が支出し、当該学生が入学した場合にのみ岩手連大から必要経費として補填する。

4）その他（資格審査等）については、募集要項に準ずる。

注）学部時代に留学して主指導予定教員と面識があり、帰国後 2-3 年して博士課程へ留学する場合は柔軟に対応する。

上記の案を 2015 年 10 月の専攻会議に提案し、参加者から意見を求めた。選考会意で出された議論の内容はおよそ以下の通りである。

1）生物生産学専攻（出席者 25 名）

渡日前入試の実施について、もう少し簡略化しても良いとの意見が大勢を占めた。

・「協定校に限るのか？」　→　限らない。

・「口頭試問の実施はスカイプの利用などか？」

・「来日して実施した面談でも良いのか？」→　可。

・「連大を終了して母国で教員をしている修了生の推薦を優遇してはどうか？」

・「面談に行くのでは無く受験生に旅費を出してやれないのか？」

2）生物資源科学専攻（出席者 31 名）

提案内容について特に意見は無かったが、各自この事案が発生する場合は、早めに連大事務に相談してくださいとの周知があった。

3）寒冷圏生命システム学専攻（参加者 5 名）

・「この制度に対する要望はあるのか？」→　ある。いくつかの連大で既に実施している。

・「協定校に限らず実施するのか？」→　実施する。

・口頭試問の評価はどうするのか？

・「スカイプのほかに，筆記試験を課してはどうか？」（例：メール添付で送って、一定時間後に返送してもらう）　→　筆記試験を実施すると入試規則を変える必要があるため「なし」にしたい。

4）生物環境科学専攻（出席者 30 名）

・面接実施時期を 1 年前までに限るのではなく弾力的に運用すべきだ。

・学会以外でも、大学間交流等で面識がある場合も含めてよいのではないか。
・本人であることを証明できるものは。その信憑性をどう担保するのか。
・口頭試問ではスカイプが一般化している。
・この方式は日本国内の遠隔地居住者にも適用するのか。

以上各専攻から意見や要望が出されたが、渡日前入試の導入については基本的に行う方向で合意が得られた。実施に向けて、さらに細かい規定を今後点検評価委員会及び代議員会で詰めていく予定である。

なお、専攻会議の議論で回答しているとおり、渡日前入試はあくまで連大受験を希望する海外の留学生への配慮として行うもので、入試方法そのものを変更するものではない。このことから、2016 年 2 月の受験者で渡日前入試の希望者がいる場合を想定し、連大事務室から資格教員に向けて、以下の内容のメールを配信した。

岩手連大資格教員に配信した渡日前入試の実施に関するメール

さて、今年度の教員会議及び専攻会議等々で資格教員の皆様から要望のありました外国人留学生が渡日する前に口頭試問を行う事が出来ないかの件について、点検評価委員会等々でも議論を行っているところですが、まだ概要が固まっておりません。

しかしながら、何とか２月の入試受験者に該当者が居られるのであれば、この入試から配慮したいという思いから、下記の出願受付期間において、該当する受験生がおられる場合には、研究科長へご一報ください。

受験生の状況や配慮方法について、これまで頂いたご意見を基に暫定的ではありますが下記のとおり対応したいと考えています。

なお、現在検討している「渡日前入試」は、海外からの入学希望者に対する入試上の配慮を行うものであって、入試方法（これまでの研究内容と博士課程での研究計画のプレゼンを受験生本人と指導教員３名を含む３大学以上の教員の参加で実施する入試）を変更・簡略化するものではありませんので、誤解のないようお願いします。

【渡日前口頭試問希望受験者の有無、報告期限】
平成２７年１１月２４日（火）１７：００迄

【試行方法】
１．平成２８年４月入学者選抜試験の入学願書を提出予定の海外からの留学生のうち、事前に渡日前の口頭試問を希望する者がいる場合、主指導教員は研究科長へその旨を願書提出期限（平成２７年１１月２４日）までに報告していただきます。
２．渡日前の口頭試問を希望する入学願書提出者については、通常の入学試験とは別の日程と構成　員で入試委員会を組織します。入試委員会の構成は、主・第一副・第二副の３名の指導教員＋主　指導教員と同じ連合講座の代議員とし、この４名で３大学以上にならない場合は、更に１名の資格教員を委員に加えることとします。

３．主指導教員は、通常の入試日程とは別に、1月の代議員会の翌日（平成２８年１月９日）～平成２８年２月１０日までの間で、受験生から多地点遠隔講義システムの接続に必要な情報を得て関係者（受験生と入試委員）の間で口頭試問の日程を調整していただき、その結果を連大事務室まで報告していただきます。
４．連大事務室では、口頭試問の日程の報告を受け、入試に関する口頭試問資料を入試委員に配付します。
５．入試委員は、口頭試問当日は岩手連大多地点遠隔講義システムの部屋に集合して、入試委員（盛岡）と受験生（海外）の２地点を結んで口頭試問を行っていただきます（海外を含む２地点以上を遠隔講義システムで結んでの入試は通信トラブルの可能性が高いため行わないこととします）。
６．口頭試問は、通常の入試と同様に、受験生による、これまでの研究内容と博士課程での研究計画のプレゼンに基づき、採点していただき、その結果を研究科長へ提出していただきますが、渡日前の口頭試問では念のため本人確認も行う必要があることから、通常の入試時間（質疑を含め３０分間）より多少長く時間を取っていただく必要があります。
７．渡日前の口頭試問の結果は、通常の入試日（平成２８年２月１８日（木））に開催される入試委員会で、入試委員から報告していただきます。
８．以後、入試の合否については通常の入試受験者と同様に、入試委員会、代議員会、研究科教授会を経て決定されます。

平成２８年４月入学者を対象とした「渡日前入試」に関して、不明な点等がありましたら研究科長または連大事務室までご相談ください。

（４）　論文の書き方等に関するセミナーについて

連合農学研究科では、学位伝達式の前日に修了生懇談会を開催し、修了生から連大の教育内容について忌憚のない意見を出してもらう機会を設けている。この懇談会の中で、修了生から論文の書き方や投稿の仕方等を教える「論文の書き方セミナー」のようなものを開催してもらうといいのではないかという意見が出されていた。これを受けて点検評価委員会で検討した結果、論文の書き方セミナー開催についての意向を把握する目的で、学生アンケートを実施した（アンケート集計結果は巻末資料参照）。

学生アンケートは、計 43 名から回答を得た。集計結果をみると、学生は論文を投稿する際に、100％主指導教員及び副指導教員から論文作成の指導を受けている（設問 6）が、「投稿論文の書き方セミナー」（遠隔講義システムを利用した 90 分程度のセミナー）を実施した場合には、84％の学生が参加したいと回答している（設問 7）。また、セミナーに参加した場合、論文の書き方で具体的に知りたい内容」については、「投稿する科学雑誌の選び方」、「英語の校正」、「投稿論文提出までの流れ」、「論文作成のペース・要点をつかんだ書き方」、「考察の組み立て方」、「エディターとのやり取り」、「上手な論文作成技術、・注意点」など、様々な要望が出された（設問 8）。

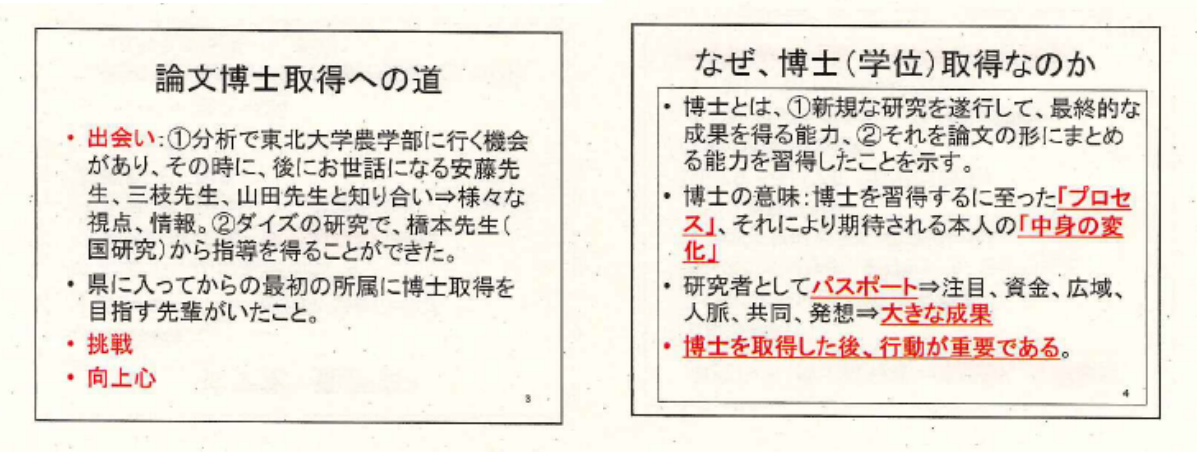
また「投稿論文とは別に、学位論文の書き方について」もセミナーがあれば 79％の学生が参加したいと回答し、知りたい内容として「投稿論文や修士論文との違い」が最も多く、

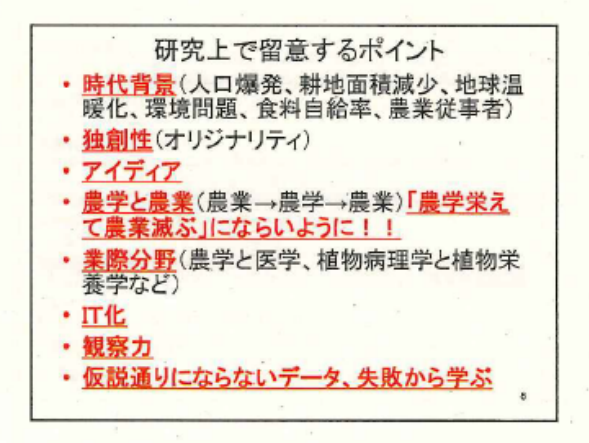
その他「論文の校正や作成の流れ」等の要望も挙げられていた（設問 9)。

点検評価委員会の中の教育活動専門委員会の議論では、当初投稿論文や学位論文はそれぞれの専門分野で違いがあるため、統一した論文作成のためのセミナーを行うことは難しい、論文作成のためのセミナーを単位化することが難しい、論文作成の指導はそもそも主指導教員や副指導教員の役割ではないか等々の意見が出され、セミナーとしての開講には否定的であった。しかし、以上のアンケート結果にみられるように、大多数の学生から論文の書き方セミナー開催の要望があることも考慮して、たとえば科学コミュニケーション（必修・1 単位）の中にセミナーの内容を盛り込み試行することも必要と考えられた。

ちなみに、平成 26 年度の科学コミュニケーション（山形大学）では「学位修得の現在・過去・未来」をテーマに、また平成 27 年度（帯広畜産大学）では「学位の修得とキャリア」の講演を実施した。

参考までに、平成 26 年度の科学コミュニケーションで山形大学の藤井弘志先生の講演で使用されたスライドの一部を掲載する。





図－　藤井弘志氏の講演スライド（抜粋）
注）平成 26 年度　科学コミュニケーションの講演。

また、科学コミュニケーションでの講義に対する学生の評価を、講義最終日に実施した学生アンケートから取りまとめると、以下の通りである。

＜プラスになった点＞
・3名の先生の話を聞いて、気を引き締めることができて良かった。
・学位修得までの流れを確認でき良かった。
・これから進路と研究の進め方など参考になって良かった。
・修了までに密度の高い研究をするように努めたいと思った。
・論文作成の注意点等、主指導教員から学んでいない点を学べて良かった。
・Impact Factorについて理解できて良かった。
・学位修得のために多くを学べて良かった、　等々。
＜改善してほしい点＞
・科学コミュニケーションのようなセミナーを定期的に開催してほしい。
・自身の研究内容は簡単に済ませて、本来の内容を充実させてほしい。
・プレゼンを英語でしてほしかった。スライドもあれば良かった、　等々。

以上のことから、今後、科学コミュニケーションで実施する講義の内容を「学位修得に関わる内容」に固定化するか。また「投稿論文及び学位論文の書き方セミナー」を定期的に開催する必要があるか。さらに、これらのセミナーの単位化の可能性について検討する必要があると考えられる。

また、セミナー開催の仕方について、英語でのセミナーと日本語でのセミナーに分ける必要があるか。あるいはセミナーは一つにして資料に英文併記だけにするか等についても、引き続き点検評価委員会及び代議員会で検討課題とする必要があると考えられる。

３．研究活動専門委員会報告

今期の研究活動専門委員会では、学生表彰基準および第一種奨学金免除候補者推薦基準について、教員会議等で出された意見を踏まえて改定する作業を行った。

（１）岩手大学大学院連合農学研究科学生表彰実施要項について

現行の学生表彰実施要項では「特に優れた業績」の評価を、以下のように規定している。

＜現行＞

---

1)　標準点

A：.国際的な学術誌・国際学会誌（エディターが国際的なもの）・・・・・・・3.0 点

B：海外の学会誌でインパクトファクターが付いていないもの・・・・・・・・1.5 点

C：国内の学会誌又は学術出版社が編集する学会誌・学術雑誌で
IF が 1 を超えるもの・・・・・・3.0 点

D：国内の学会誌又は学術出版社が編集する学会誌・学術雑誌で
IF が 1 以下のもの・・・・・・・1.5 点

2)　加点要素

E：学位申請者が筆頭著者の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2.0 点

F：英文のもの（A と C を除く。）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・0.5 点

G：評価の高いもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・IF 数

平成 27 年度の教員会議では、このうち IF の扱いについて、「分野によって投稿可能な IF の数値が大きく異なるため、そのままの IF 値を使うと不公平になる」という意見がある一方、「学生が IF に高い雑誌に投稿する意欲を評価すべきで IF 値は重視すべき」という意見もあった。研究活動専門委員会では、これらを踏まえて改訂案を作成し、これを 10 月 9 日の点検評価委員会で検討した結果、以下のような試案を得た。試案の要点は、やや煩雑な IF の扱いを一括して、E の項目のみで評価することである。

＜改訂案＞

---

1)　標準点

A：.国際的な学術誌・国際学会誌（エディターが国際的なもの）・・・・・・・3.0 点

B：国内の学会誌又は学術出版社が編集する学会誌・・・・・・・・・・・・・・2.0 点

2)　加点要素

C：学位申請者が筆頭著者の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2.0 点

D：英文のもの（A を除く。）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・0.5 点

E：評価の高いもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・IF 数（上限 3 点）

IF について、現行の評価法と点検評価委員会で検討した改訂案とで、試みにある年度の学生をサンプルとして試算した結果は下表のとおりである。表中の網掛けは、通常、学生表彰を受ける上位３名（１位～3 位）を示した。

表－ 現行と改訂案による学生評価点数・順位の比較

	現行		改訂案	
学生記号	合計点	順位	合計点	順位
A	6.504	9	6.504	9
B	8.000	5	10.000	5
C	5.563	13	5.563	13
D	5.753	12	5.753	12
E	5.877	11	5.877	11
F	12.000	4	15.000	2
G	12.050	3	12.050	4
H	6.206	10	6.206	10
I	5.560	14	5.560	14
J	37.276	1	32.000	1
K	7.123	7	7.123	8
L	7.000	8	8.000	7
M	7.148	6	8.148	6
N	14.850	2	14.850	3

表からわかるように、現行で1位の学生は改訂案でも1位に、現行で２位の学生は改訂案で３位に、現行で３位の学生は改訂案では４位になり、現行で４位の学生が改訂案では３位に上がっている。

それ以外では、7 位と 8 位の学生が入れ替わった程度で、全体として大きな変動はみられなかった。　いずれの場合も、IF の高い雑誌に投稿した学生は上位になり、改訂案では IF 値の上限を３点にしたことで、教員会議で出された意見を折衷する改善案になっていると思われる。

（２）岩手大学大学院連合農学研究科第一種奨学金返還免除者選考要領について

点検評価委員会では、同要領にある　Ⅲ．評価方法　専攻分野に関連した学外における研究教育活動等に関する業績のうち『イ　学会等で受賞した場合』について、学生本人が筆頭著者でなくても半分の得点が付与されるのは好ましくないのではないかとの意見が出された。これを受けて、下記の通り改訂案を作成した。

＜現行＞

・学会が出す優秀発表賞・ポスター賞など・・・・・・・・・・・・・・15
　（筆頭者でない場合）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(7.5)
・支部会が出す優秀発表賞・ポスター賞など・・・・・・・・・・・・・10
　（筆頭者でない場合）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(5)

＜改訂案＞

・学会が出す優秀発表賞・ポスター賞など・・・・・・・・・・・・・・15
・支部会が出す優秀発表賞・ポスター賞など・・・・・・・・・・・・・10

（３）教員の主指導、副指導等の選考基準の確認および見直しについて

点検評価委員会では、教員による学生の研究指導体制について、

1)連携機関からの教員選定に関する原則の見直し
2)主、第 1 副、第 2 副を別々の 3 大学教員で構成できるよう見直す案とその課題

の 2 点について検討した。その結果、

1)連携機関からの教員選定に関する原則の見直しについては、現在の主、第 1 副、第 2 副の構成と大きく変わらない方が好ましいとの結論を得た。

2)主、第 1 副、第 2 副を別々の 3 大学教員で構成できるよう見直す案とその課題については、学生と同じ大学に所属する第 1 副指導教員の役割がかなり重要な場合が多いと考えられるため、主、第 1 副、第 2 副の各指導教員が別々の大学にいる指導体制は困難で、現在のあり方が望ましいとの結論を得た。

1)、2）、いずれの場合も、学生指導体制の構築で問題のあるケースはわずかと思われるため、レアケースを年頭にして原則を複雑化してわかりにくくするのではなく、問題が起こった場合に、その都度検討し、柔軟に対応すれば良いように思われる。

４．管理運営専門委員会報告

（１）主指導教員への予算配分の見直し

点検評価委員会では連大予算の減少を受け、主指導教員への配分を重点化させることで効率的な教育を維持するべく予算配分の見直しを行った。今回の見直しでは、主指導教員へのインセンティブ的要素を取り入れ、教員が学生の確保に積極的になってもらう狙いも含まれている。

教員間の議論を踏まえて、連大事務室が中心になり、資料の通り２つの見直し案が作成・提示された。この２つの案を専攻会議で示して教員からの意見を聴取し、こられの意見を集約して検討した結果、数年後に再び見直すことを前提に、見直し案１が了承された。
以下はその過程で得られた教員からの意見である。

1. 予算配分時に学生経費を明示して、教員に連大学生の指導経費であることを意識してもらうことが必要。（岩手）
2. 見直し案１と２について、学生を２～3 名持っている教員の割合が少ないのであれば、案１のほうがいいのではないか？（岩手）
3. 案１、案２とも、第一副指導教員の配分についても減額しても良いのではないか？（弘前）
4. 案１のほうがよい。（弘前）
5. 第二副指導教員の経費を減らす事には賛成だが、旅費を７割も減らして不足が生じないか。（山形）（過去２年の実績を見ると、各大学とも第二副指導教員が使用する旅費の総額が約２５％程度となっており、７割減額をしても全体としての予算は確保されると判断している。）
6. 見直し案１と２の中間の案。たとえば、学生２名なら 1.75 ポイント、３名なら 2.5 ポイントという案も考えられるのではないか？（弘前及び帯広）
7. 弘前大学での意見分布：教員会議出席者の挙手で、案１約 70%、案２約 30%であった。

また、予算運用について以下の質問、要望が寄せられた。

1. 岩手連大の予算配分の内容を、構成大学間で同じにできないのか？（山形）
   （連大予算の配分は委託、受託のルールで行っているため、構成大学に配分された予算の使途について連大としてお願いはできるが強制はできない仕組みに現在はなっている。）
2. 研究科長裁量経費による共同研究募集について、帰国外国人留学生との共同研究の場合は１大学でよいこととしているが、基本は構成大学間の共同研究の支援に置くべき。（山形）
3. Ｑ．教員一人あたり、平均で何名の学生を指導しているのか教えてほしい。（帯広）
4. Ｑ．研究科教授会の開催を年１回にすれば、経費を大幅に節約できるのではないか？（帯広・新入生歓迎会で）

（２）専攻・連合講座の再編・連大運営の改革

連合農学研究科を構成する 4 大学では、定年退職する方と新しく連大の資格教員となる方の連合講座は同じとは限らず、結果として、各連合講座の教員数にばらつきが大きくなってきている。さらに構成大学の学部・修士課程の改革を踏まえ、さらに法人第 3 期目の国立大学情勢を踏まえた、予算を含む連大の管理運営のあり方について検討する必要がでてきた。

連合農学研究科の専攻・連合講座の再編について、平成 27 年度は意見を集める段階にとどまったが、以下に記した専攻会議等で出された意見も踏まえつつ、次年度以降に対応を協議する必要がある。

専攻・連合講座の再編について専攻会議等で出された主な意見

1. 原案は無いのか？微修正なのか？大幅な改組か？など。
2. 学生確保を意識して留学生の出身国（中国・タイなどアジア周辺国）や欧米の PhD プログラムの状況を調査して検討すべき。
3. 各構成大学での改組や第 3 期中期計画などの情報を収集、共有、分析して将来を見据えた構成にすべき。
4. 他大学を新たな構成大学に加えることは考えられるか。
5. 連大間、連大と他大学院との連携の実態調査が必要ではないか。
6. 岩手連大の諸会議を通じて対応を検討していく必要がある。
7. 寒冷圏生命システム学専攻ができる前の専攻に教員を戻す。
8. 専攻や連合講座の名称変更も含めて再編する。
9. 寒冷圏生命システム学専攻を他の専攻の連合講座として名称を維持する。

資料　連大予算の見直し案

（見直し案）１

趣　旨　　各教員へ配分している『教員経費』について、ＲＡ経費や研究遂行協力員経費への補填額が大きくなり、１人あたりの教員経費配分額が減り続けている。このことにより、全体的な経費配分状況及び教員経費の配分割合等について見直し、限られた予算を有効に配分できるよう下記のとおり提案したい。

改正案

１．主指導教員の配分率の改正（年配分）

現　行	学生１名につき	１．０	ポイント
	学生２名につき	１．５	ポイント
	学生３名以上	１．７５	ポイント
	過年度学生	０．７５	ポイント

改正案	学生１名につき	１．０	ポイント
	学生２名につき	１．５	ポイント
	学生３名以上	２．０	ポイント
	過年度学生	０．５	ポイント

２．減額の対象

- 第二副指導教員経費　　０．５　ポイント　→　０．２５　ポイント
- 第二副指導旅費　　現行の７割減
- 過年度学生教員経費　　０．７５ポイント　→　０．５　ポイント
- 科学コミュニケーション担当代議員　７万円　→　０円
- 科学コミュニケーション講師経費　　２万円　→　０円（外部講師は除く）
- 代議員及び事務担当者旅費　　１３万円　→　０円（科学コミュニケーション）
- 講義担当講師（日本語）　　５万円　→　２万円
  ※　学生を持っていない教員が担当する場合は　５万円
- 講義担当講師（英　語）　　１０万円　→　５万円
  ※　学生を持っていない教員が担当する場合は　８万円
- 科学英語相談研究支援経費　上限１０万円　→　上限５万円（帯広 ERC 含む）
- 実践統計学相談員　　上限１０万円　→　上限５万円
- 実践統計学講師　　上限１０万円　→　上限８万円

還元額（およそ）４，０００，０００円

※　１．の改正案で（平成２６年分）計算すると、

現　行　　１ポイントあたり　６８４，１６８円
改正案　　１ポイントあたり　７５５，５１３円

３．長期履修学生分の教員経費配分

現行は、５年間の長期履修とした場合、年間約７０万円（１ポイント）を５年間配分していたが、改正案は、（長期履修初年度のポイント×３年間）÷５年（長期履修期間）として配分する。

４．１０月入学学生分の教員経費配分

Ａ．主指導　　前期配分ポイントと併せて換算
　　→１．７５ポイントから上限２．００ポイントに改正
Ｂ．第一副指導　　配分無　→　現行どおり
Ｃ．第二副指導　　配分無　→　現行どおり

（見直し案）２

趣　旨　→　案１に同じ。

改正案

１．主指導教員の配分率の改正（年配分）

現　行	学生１名につき	１．０	ポイント
	学生２名につき	１．５	ポイント
	学生３名以上	１．７５	ポイント
	過年度学生	０．７５	ポイント

改正案	学生１名につき	１．０	ポイント
	学生２名につき	２．０	ポイント
	学生３名以上	３．０	ポイント
	過年度学生	０．５	ポイント

２．減額の対象　→　案１に同じ。

還元額（およそ）４，０００，０００円

※　１．の改正案で（平成２６年分）計算すると、

現　行	１ポイントあたり	６８４，１６８円
改正案	１ポイントあたり	６６５，２１７円

３．長期履修学生分の教員経費配分　案１に同じ。

４．１０月入学学生分の教員経費配分

Ａ．主指導　　前期配分ポイントと併せて換算

→１．７５ポイントから上限３．００ポイントに改正

Ｂ．第一副指導　　配分無　→　現行どおり

Ｃ．第二副指導　　配分無　→　現行どおり

関 連 資 料

資料１　学位授与状況

平成 27 年 3 月現在

年　度	課　程　修　了										論　文　提　出	
	生物生産科学		生物資源科学		寒冷圏生命システム学		生物環境学		計			
	授与数	外国人	授与数	外国人	授与数	外国人	授与数	外国人	授与数	外国人	授与数	外国人
平成4年度	3	0	3	1			3	1	9	2	0	0
平成5年度	3	1	4	2			6	2	13	5	1	0
平成6年度	2	1	12	7			4	1	18	9	5	0
平成7年度	3	2	7	6			3	2	13	10	4	0
平成8年度	6	6	10	4			6	2	22	12	2	0
平成9年度	6	4	13	5			11	5	30	14	7	0
平成10年度	9	9	10	7			7	4	26	20	13	1
平成11年度	16	8	6	1			7	2	29	11	16	1
平成12年度	9	6	12	4			4	3	25	13	11	2
平成13年度	17	8	9	5			6	2	32	15	8	0
平成14年度	11	4	11	2			9	3	31	9	11	1
平成15年度	17	15	17	4			14	6	48	25	11	1
平成16年度	7	6	16	4			13	3	36	13	10	0
平成17年度	5	3	14	6			10	3	29	12	10	1
平成18年度	8	4	19	3			7	1	34	8	20	1
平成19年度	12	7	12	2			10	4	34	13	2	0
平成20年度	15	6	19	5	4	1	6	3	44	15	5	1
平成21年度	6	2	17	5	4	0	11	4	38	11	4	1
平成22年度	8	2	18	1	2	1	5	0	33	4	5	0
平成23年度	4	2	8	4	4	2	5	2	21	10	5	2
平成24年度	12	7	5	2	4	2	6	1	27	12	6	2
平成25年度	9	6	13	2	2	1	4	1	28	10	3	0
平成26年度	8	4	5	3	4	2	7	3	24	12	9	2
平成27年度	9	5	3	2	3	0	9	4	24	11	4	2
累計	205	118	263	87	27	9	173	62	668	276	172	18

資料２　標準年限内での学位授与状況（平成 27 年 3 月現在）

(1)　入学生の推移

専攻	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
生物生産科学	12 (8)	11 (6)	8 (2)	14 (4)	10 (5)
生物資源科学	10 (3)	11 (6)	8 (2)	8 (2)	13 (4)
寒冷圏生命システム学	4 (1)	6 (1)	0 (0)	6 (2)	6 (4)
生物環境科学	7 (4)	11 (5)	17 (2)	10 (4)	10 (6)
合計	33 (16)	39 (18)	33 (6)	38 (12)	39 (19)

(　)は留学生

(2)　学位授与の推移

年　度	課　程　修　了					論　文 提　出
	生物生産科学	生物資源科学	寒冷圏生命システム学	生物環境科学	計	
平成23年度	4 (2)	8 (4)	4 (2)	5 (2)	21 (10)	5 (2)
平成24年度	12 (7)	5 (2)	4 (2)	6 (1)	27 (12)	6 (2)
平成25年度	9 (6)	13 (2)	2 (1)	4 (1)	28 (10)	3 (0)
平成26年度	8 (4)	5 (3)	4 (2)	7 (3)	24 (12)	9 (2)
平成27年度	9 (5)	3 (2)	3 (0)	9 (4)	24 (11)	4 (2)

( )は留学生

(3)　標準年限内での学位授与率（修了年度を基準）

修了年度	修了者数（A）	標準年限修了者（B）	標準年限内修了率（B／A）
平成23年度	21	14	67%
平成24年度	27	15	56%
平成25年度	28	20	71%
平成26年度	24	19	79%
平成27年度	24	15	63%

(4)　標準年限内での学位授与率（入学年度を基準）

入学年度	入学者数(A)	標準年限修了者(B)	標準年限内修了率(B／A)
平成21年度	34	13	38%
平成22年度	34	18	53%
平成23年度	33	20	61%
平成24年度	39	19	49%

資料３　学生数（平成 27 年 5 月現在）

（1）定員及び現員

専攻	定員		現員							
	入学定員	収容定員	1年次	留学生	2年次	留学生	3年次	留学生	計	留学生
生物生産科学	8	24	6	4	12	4	17	6	35	14
生物資源科学	10	30	7	1	8	2	13	3	28	6
寒冷圏生命システム学	6	18	3	2	6	2	7	1	16	5
生物環境科学	8	24	7	3	10	4	29	7	46	14
計	32	96	23	10	36	12	66	17	125	39

（2）外国人留学生

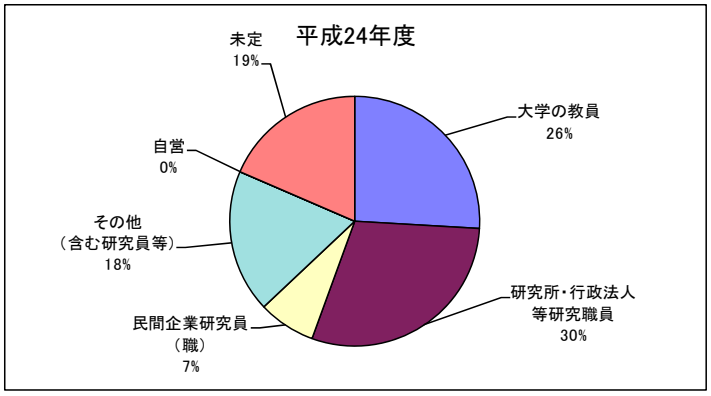
出身国	生物生産科学			生物資源科学			寒冷圏生命システム学			生物環境科学			計		
	学生数	女子	国費	学生数	女子	国費	学生数	女子	国費	学生数	女子	国費	学生数	女子	国費
中国	4	2	2	4	2	1	2	2	0	8	3	1	18	9	4
バングラデシュ	2	0	1				1	0	1	1	1	0	4	1	2
ウガンダ										1	1	1	1	1	1
タイ	1	0	0				1	0	0	1	0	1	3	0	1
フィリピン				2	1	0							2	1	0
ミャンマー	1	1	1				1	0	1				2	1	2
インドネシア	4	1	1										4	1	1
ネパール	1	0	1										1	0	1
韓国										1	1	0	1	1	0
ベトナム	1	0	0							2	0	1	3	0	1
計	14	4	6	6	3	1	5	2	2	14	6	4	39	15	13

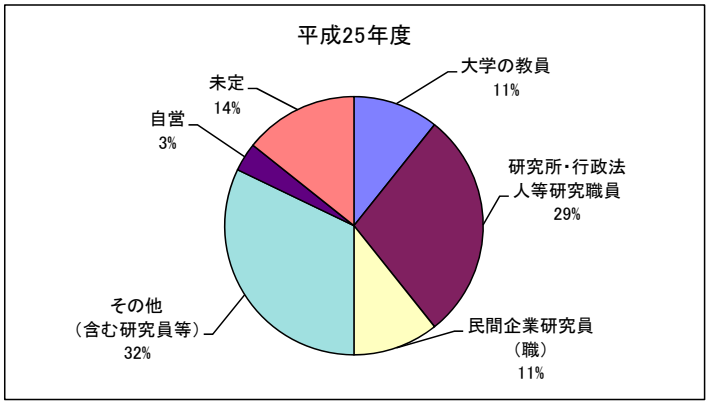
（3）配属大学別学生数

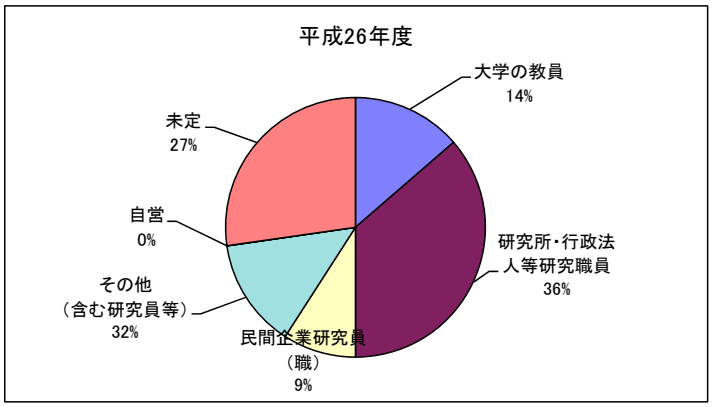
配属大学	1年次	留学生	2年次	留学生	3年次	留学生	計	留学生
弘前大学	4	2	12	2	8	0	24	4
岩手大学	4	0	12	5	23	7	39	12
山形大学	6	4	3	2	8	0	17	6
帯広畜産大学	9	4	9	3	13	2	31	9
計	23	10	36	12	52	9	111	31

資料４　修了生の就職状況（過去３年間）

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
大学の教員	7	3	3
研究所・行政法人等研究職員	8	8	8
民間企業研究員（職）	2	3	2
その他（含む研究員等）	5	9	3
自営	0	1	0
未定	5	4	6
合計修了者数	27	28	22







資料５　岩手大学大学院農学研究科の教員数（平成 23 年 5 月現在）

専攻	連合講座	連合農学研究科教員					指導教員等				
		教授	准教授	講師	助教	計	教授	准教授	講師	助教	計
生物生産科学	植物生産学	12	18	0	4	34	5	8	0	2	15
	動物生産学	17	9	1	2	29	13	5	0	1	19
	生物制御学	11	9	0	2	22	7	6	0	1	14
生物資源科学	生物機能開発学	12	11	0	2	25	10	8	0	2	20
	ゲノム工学	9	5	0	2	16	6	4	0	0	10
	生物資源利用学	17	15	0	3	35	13	6	0	3	22
寒冷圏生命システム学	熱・生命システム学	13	6	1	1	21	9	3	1	2	15
生物環境科学	地域資源経済学	11	12	0	1	24	7	9	0	1	17
	地域環境工学	15	16	1	3	35	11	11	0	3	25
	地域環境管理学	15	11	2	2	30	12	10	2	2	26
合計		132	112	5	22	271	93	70	3	17	183

資料６　ＦＤ講演会資料（平成 28 年 2 月）

学生指導上の留意点について
－教育課程の実質化に伴う主な改正点の確認－

連合農学研究科FD講演会
比屋根　哲
2016年2月19日

＊以下のスライドの内容は、今後、連大ホームページでみられるようにします。
＊新入生を受け入れる指導教員には届けたいと思います。

FDの目的

- 平成19年度以降、岩手連大はゼミナール制から単位制に移行し、教育課程の実質化に向けて重要な制度等の改正を行ってきました。
- 連大では、これら制度等の改正点について、研究科教授会、構成大学教員会議、連大メールニュース等で適宜案内してきましたが、研究科教授会が学生を指導している資格教員等に限られているため、新しく学生指導を担当する教員等で、重要な事柄が見過ごされたまま学生指導を行う事例が散見されるようになってきました。
- そこで、今回のFDでは、学生から連大事務室に相談があった事案を含め、最近改正された教育課程の重要事項を再確認するとともに、学生指導上の全般的な留意点について話題提供したいと思います。

学生の受け入れに際して

遠方にいる学生への旅費支援について
－「通学」のための旅費は支給されません。

- 岩手連大では、社会人入学希望者で、普段は配属大学から遠方にいる学生であっても、講義の履修や研究指導体制に支障がない場合は受け入れることができます。
- その場合、研究指導を受けるために配属大学に出かけるための旅費は、「通学」にあたることから支給されません。同様に、科学コミュニケーション等の講義にかかる旅費の支援も、配属大学から目的地までの旅費を基準に支援額が算定されます。
- 入学後トラブルが起きないように、遠方にいる学生を受け入れる場合は、事前に旅費支援の制約について説明をお願いします。

海外からの受験生に対する配慮について

- 岩手連大では、海外からの受験生を受け入れる場合、指導予定教員が過去に国際学会などで受験希望者本人と面談し、博士課程学生として受け入れても十分に修了させることが可能と判断している場合は、通常の入試期日以前にTV会議システム等を使用した口頭試問を「渡日前入試」として実施し、学生が受験のためだけで渡日しなくても済むように配慮できることにしています。海外から「渡日前入試」を希望する場合は、事前に連大事務室までご相談ください。
- この「渡日前入試」は、あくまで海外からの受験生への配慮として行うもので、入試制度そのものは一般入試と同様、これまでの研究報告と博士課程の研究計画についての口頭試問を3大学以上の教員の参加で実施することになります。

学生の経済状況に目配りを（その１）

- 学生、とくに留学生の中には、入学後、生活費の工面が困難で、すぐに休学するケースがありました。
- また、国費留学生が過年度生になると、急に経済状況が悪化し、連大に支援を求めるケースもみられました。
- 指導予定教員は、学生を受け入れる場合、研究面だけでなく、当該学生の経済支援や研究上での配慮の必要性についても学生とよく相談し、博士課程を無事修了できるように指導をお願いします。
- この点は、学生入学後も同様の目配りが必要です。

連大入試（口頭試問）は厳格に行われます

- 口頭試問は、口頭試問委員が参加する会場の全受験生について審査が行われます。
- 自らが主指導・副指導教員として関係する受験生の口頭試問の時だけでなく、口頭試問会場の全時間帯に参加している必要があります。

合格から入学前後の対応

リサーチアシスタント、研究遂行協力員への申請

- RAは、合格が決定したら入学前に申請できます。
- RAは、主指導教員からの申請になります。教員が申請し忘れると、学生に大きな不利益を与えることになりますので、ご留意ください。
- 研究遂行協力員は、主として報酬を受け取ることができない社会人学生に対して授業料を半額免除する制度で、入学後に募集がはじまります。申請は学生が行いますが、主指導教員も申請に当たっては内容を十分確認するようにしてください。
- とくに会社側から授業料分の補助を受けている場合、大学の審査で問題になる場合がありますので、申請の必要性を含めて、学生と十分に相談してください。

長期履修の手続きでは学生と十分に相談を

- 長期履修制度は、仕事に従事しながら大学院課程に入る社会人学生のために設けられた制度で、3年間の授業料で最長5年間（3+2年間）大学で指導を受けることができます。
- 長期履修は、修了1年前まで申請や変更が可能となっています（修了年次に入ってからの延長はできません）。
- 長期履修制度は、実質的に必要な学生に対して設けられた制度で、はじめから「保険」のような感覚で手続きすることは認めていません。指導教員は、学生が長期履修を必要とする状況かどうか、学生とよく相談してください。

教育課程上の重要なルール

毎年次、進捗状況報告会の開催は必須

- 進捗状況報告会は、学生とその指導教員3名が一同に会し（TV会議を含む）、学位論文研究の進捗状況を確認する場で、年1回の開催が義務づけられています。指導学生と副指導教員間で日程調整し、確実に実施し、報告書を提出してください。
- 2年間の進捗状況報告書の提出で特別演習（1単位）を付与することにしており、未実施の場合は修了できません。
- 過年度生の場合は、中間発表会を開催する前の年次まで進捗状況報告会を開催しなければなりません。「特別演習の単位が出たら開催しなくてもよい」は間違いです。

＊特別演習の単位報告は学位申請時にあわせて行うよう、制度変更を検討しています。

学位申請に必要な「主論文」について

- 岩手連大では、学位論文の基礎となる学会誌等に発表された学術論文（主論文）が1編以上あることが、修了要件になっています。
- 主論文は、レフリー制度のある学術雑誌で学位申請者が筆頭著者である必要があります。
- 近年、複数筆頭著者の論文が増加していますが、岩手連大では複数筆頭著者の論文単独では1編の主論文としてカウントしません。
- 「主論文」は、学生教育の一環で作成する論文です。指導教員は、この点に留意して学生の研究能力が確認できる論文として、投稿の指導をお願いします。

主論文が連名の場合、誰を連名者にするかは、関係者で十分に相談を

- 学生が主論文では、多くの場合指導教員が連名者になりますが、それ以外でも研究に関わった研究者や学生が連名者になる場合があります。
- 連名者は、その研究に実際に関わった者でなければならず、そうでない場合は研究倫理上の問題が起こりえます。
- とくに、当該学生の主論文に、別の学生が連名者として加わる場合、その学生は同じ論文を主論文に加えることはできません。

＊連名者については、当該論文を学位申請には使わないことを認める承諾書の提出を求める場合があります。

学位論文中間発表会の開催期限は厳守

- 学位論文中間発表会は、学生とその指導教員3名が一同に会し（TV会議を含む）、当該学生が学位論文の執筆に入ってよいか判断するためのもので、学位申請の9月前から3ヶ月前の期間で開催が義務づけられています。指導学生と副指導教員間で日程調整し、確実に実施し、報告書を提出してください。
- 中間発表会後、9ヶ月以内に学位申請できなかった場合（申請の見込みがなくなった場合）は、再度、中間発表会を実施していただく必要があります。

＊この場合、1回目の中間発表会は、3回目以降の進捗状況報告会に読み替えることになります。

学位申請書類の提出締切日の厳守

- 学位論文申請のための書類は、連大が定めた締切日を越えた場合は、申請者本人の責に帰らない特別な事情（査読の遅延は含まない）を除いて、公平性の観点から受け取ることができません。
- 学生には入学オリエンテーションの際に、学位申請に必要な学会誌論文は、時間的にゆとりを持って早めに投稿するよう指示しています。主指導教員も、この点に十分留意して論文投稿の指導をお願いします。

遡及修了は、あくまで例外的措置

- 遡及修了制度は、定められた学位申請期限に間に合わなかった学生が、在学年次の最終日（3月31日または9月30日）までに学位申請書類一式を提出して退学し、直近の研究科教授会で学位論文の提出年度に遡って学位を授与し修了を認めるものですが、これはあくまで例外的な学生のための救済措置とお考えください。
- 遡及修了者は、いったん退学を挟むことから連大研究員にはなれません。また、海外では遡及修了の制度が理解されず就職に支障をきたす場合もありますので、この制度を前提とした研究指導は行わないようにしてください。
- また、遡及修了や論文博士で学位を取得する方法について、学生が主指導教員と相談せずに、連大事務室へ照会してくるケースが増加しています。学位申請は主指導教員の合意なしに学生だけでは行えませんので、学生の状況確認と、十分な意思の疎通を図るようにしてください。

その他、学生支援に関わる事項

学生の経済状況に目配りを（その2）

- 入学時に限らず、RAへの申請は、指導教員が出し忘れると、学生に大きな不利益を与えることになります。
- 研究遂行協力員は「優秀な学生」に対して授業料を半額免除する制度で、とくに2年次以降は申請ガイドラインに沿って審査されます。進捗状況報告会が未実施だったり、3年次後期で論文を投稿していない等の場合、申請できませんのでご留意ください。
- 過年度生が授業料免除や研究遂行協力員に申請する場合は主指導教員の申請理由書の提出が必須です。最近は審査が厳しく、直近の半年間で過年度するに至った理由が明確でない場合は不許可になりますので、ご注意ください。

予算使用上のルールの確認を

- 学生が研究インターンシップや国際学会で海外に出た場合、やむを得ず学生が立替払いするケースがありました。その場合には、事後、主指導教員がすみやかに学生の立替分を処理する手続きを行ってください。学生の立替分は、年度を跨いでしまうと公費では支払えなくなりますので、ご注意ください。
- この他、予算の使用に関しては、各大学で定められたルールが適用されますので、主指導教員は常識に頼らず、連大事務室や構成大学の担当者と相談しながら、適正な予算の執行に心がけてください。

おわりに

- 学生の教育課程に関わる諸制度、学位申請に関わる手続き、各種経済支援制度などのお問い合わせは、岩手連大事務室まで。

rendai@iwate-u.ac.jp

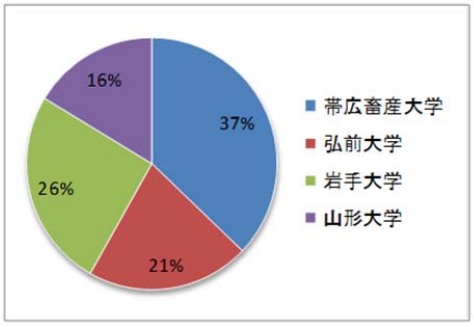
＊スライドの内容は、連大ホームページでみられるようにします。
＊新たに学生を受け入れる指導教員には届けたいと思います。

資料７　論文の書き方セミナーに関するアンケート調査結果

1）実施期間　平成27年6月10日～26日
2）回答数　43／124　回答率34%

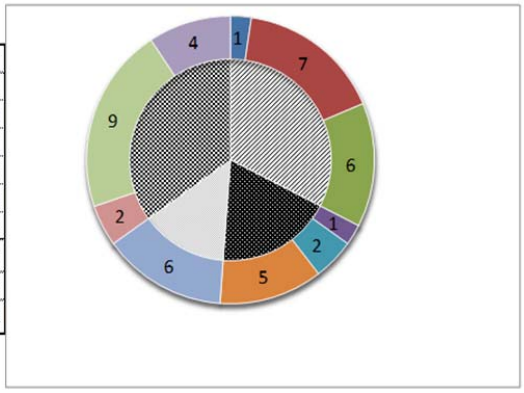
設問1　構成大学を選択してください。

帯広畜産大学	16
弘前大学	9
岩手大学	11
山形大学	7



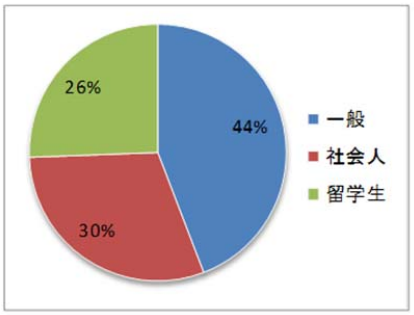
設問2　あなたの所属する連合講座を教えてください。

植物生産学	1
動物生産学	7
生物制御学	6
生物機能開発学	1
ゲノム工学	2
生物資源利用学	5
熱･生命システム学	6
地域資源経済学	2
地域環境工学	9
地域環境管理学	4



設問3　学生区分を教えてください。

一般	19
社会人	13
留学生	11



設問4　入学年月を教えてください。

1年次　2015.4月入学	11
1年次　2014.10月入学	4
2年次　2014.4月入学	11
2年次　2013.10月入学	4
3年次	7
2012年4月以前入学者	2

設問5　Q1:あなたは学会誌に論文を投稿したことがありますか？または投稿論文を書きつつあるところですか？

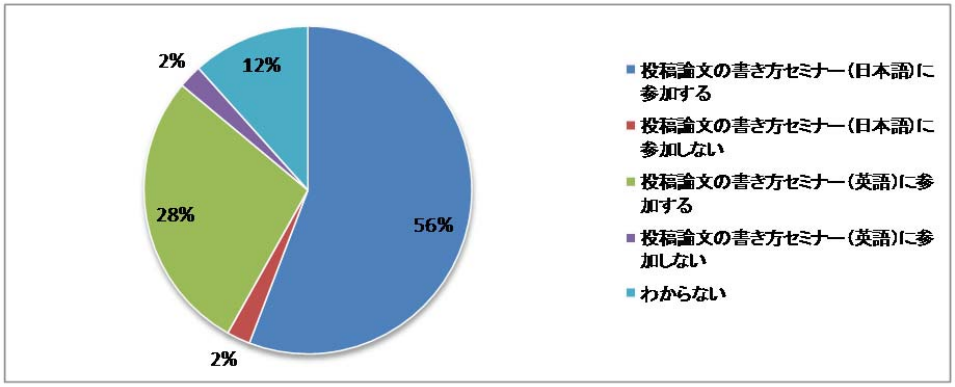
はい	33
いいえ	10

設問6　Q2　Q1で「はい」と答えた方にうかがいます。あなたが論文を投稿する際，主指導教員や副指導教員から指導を受けましたか（受けていますか？　（いずれか1つ）

はい	33
いいえ	0

設問7　Q3　以下のセミナー(90分程度で遠隔講義システムを使用)があれば参加しますか？　(いずれか1つ)

投稿論文の書き方セミナー(日本語)に参加する	24
投稿論文の書き方セミナー(日本語)に参加しない	1
投稿論文の書き方セミナー(英語)に参加する	12
投稿論文の書き方セミナー(英語)に参加しない	1
わからない	5



設問8　Q4　あなたが，上記のセミナーに参加するとすれば，具体的に何を知りたいですか？

・Mendeley等の論文管理ソフトを用いた、Referenceの効率的な作成方法　(テンプレートに存在しないジャーナルへの投稿を想定)

・科学雑誌の選び方、英語の校正についての実際、各分野における教官の論文作成や投稿時の感想や助言

・strategies and methods to write papers, as well as graduation thesis

・学会へ投稿する論文と、自治体の研究所から発行される「研究報告」とはまったく違うと言われたことがあるが、具体的に何が違うのかはっきりとわからない。どのように書けば、投稿できるものになるのかを知りたい。

・投稿論文の書き方は投稿先の雑誌や分野、論文の趣旨によって性格がかなり異なるので参加はしない。

・投稿論文提出までの流れ。

・投稿する雑誌の決め方や掲載料の雑誌ごとの違いはどの程度幅があるのか/サマリー、イントロ、材料と方法、ディスカッションにどのようなことを記述すればよいか/英文校正をどこに依頼するのか/査読レフェリーに論文のどのようなことを修正するよう、言われるのかの具体例。等の基本的な部分を主に講義していただけると良いです。

・読みやすい、またはアクセプトされやすい文章構成やテクニックなど

1. Specific formats to follow in writing a dissertation/ manuscript.
2. How to interpret statistical analysis data?
3. How to ensure acceptance of manuscript for publication?

・論文作成のペース・要点をつかんだ書き方(書いているうちにあれもこれも書き足したくなり論文が膨れるから)
・要旨のまとめ方(コンパクトにまとめられず、膨れるから)

・Intro-Result-Discussionの流れについて、具体例(良い論文、あまり良くない論文)を挙げて紹介する。(良くない論文を挙げるのは難しいかも知れませんが)
・Introでどのように問題を提起し、どのように帰結させているかということについて参考にしたい。

・コツやよくない書き方の例

英語の文章の改変の仕方などが知りたい。コピペは良くないが、同じようなことを言いたい場合が多々ある。その中でその文章を参考にしながら自分のオリジナルの文章をうまく作成する方法が知りたい。

①既往研究の書き方。
②考察の進め方、考え方。

・他の研究室（自分の所属研究室以外）ではどのような点に留意して論文作成を行っているのか、また、論文作成にあたってこれだけは気を付けなければならないといった点について知りたい。

・考察の組み立て方。
・エディターとのやり取り

書き方、直し方
採択までのプロセスや執筆から投稿までの計画の建て方など。

It is better if the reporter can take some examples from doctor students and offer some really useful guidelines to wirte a scientific paper or thesis.

・農学は、研究領域・範囲あるいは学問の幅が広いと思っております。例えば、動物系、工学系、植物系、作物系、肥料系、生態系、環境系、機械系、施設系・・・・実学系？　など沢山あります。具体的な回答ではありませんが、セミナーを開催していただけるのなら、日本語編、英語編でも3つくらいの研究領域に分けていただければ、幅広い専攻・専門分野の学生にとって有意義になると思われます。現実的にはリジェクトされない論文執筆のコツを知りたい学生は多いと思います。また、初体験である主論文作成の基本なども参考になると思います。ただ、論文（副論文、主論文）を簡単に作成できると思われてしまうと将来のためにならないような気がいたします。

・上手な論文作成術
・投稿ジャーナルの選び方
・投稿の手順・注意点

・Tutorial lecture is needed meaning lecturer give students an example of writing a paper from the beginning (data preparation) until final draft for submission.

・セミナーでは、論文作成、投稿までの作業フローや書式など、基本的な事項を知りたいです。実際に投稿された論文を用いて、注意点や詳細の説明があるとイメージがつきやすいです。

・The strategy of how to write effective sentences and paragraph or idea, to choose journal, to ensure the submitted manuscript will be accepted.

・データだけでは説明出来ない箇所をどこまで予想して書けば良いのか。
・突っ込まれない様に済む方法

(1) how to write the good thesis or paper
(2) structure of thesis / paper and function
(3) font letter
(4) cite the information
(5) order of reference
(6) order of title of table / figure
etc

よく生じる問題と解決策、テクニック

format of thesis
detailed schedule of thesis submit and defense

学術的文章・表現の書き方、文章の構成など詳しく学びたい
how to get motivated to write the paper.

・論文の基本ルール、自分のテーマにふさわしい学会や雑誌にはどんなものがあるか、査読のポイント、参照すべき文献の見つけ方、そもそも博士論文に向けてどのような目標ポイントを置いて、スケジュールを立て、学会投稿を位置づけて行ったらよいかなどの基本的な考え方

投稿費用

・投稿から雑誌掲載に至るまでの一連の流れ。
・査読にかかる期間が長期化しないためのポイント。

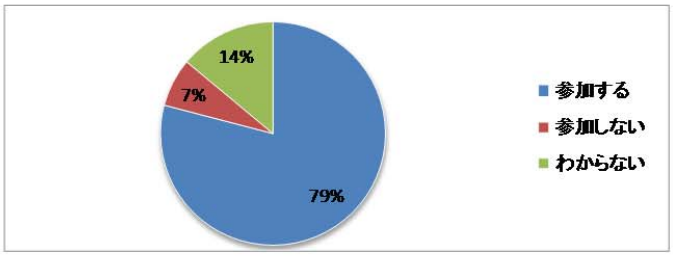
・自分の書いた（書こうとしている）論文を投稿する際に、レベルに見合ったジャーナルの見つけ方
・得られたデータの統計処理の仕方について
・最初にやるべきこと、書き方の手順

・博士課程学位取得に向けた論文作成のポイントについて

・It will be very helpful if I could get some advice on how to select a specific journal, and the methods of explaining my results most clearly.

設問9　Q5　投稿論文とは別に，学位論文の書き方についてもセミナーがあれば参加しますか？

参加する	34
参加しない	3
わからない	6



設問10　Q6　学位論文の書き方セミナーに参加するとすれば，具体的に何を知りたいですか？

・科学雑誌への投稿論文との構成の違い

・academic papers searching
・strategies to write papers and thesis
・methods to write papers and thesis

・他の論文の引用はどこまで許されるのか。また、学会へ投稿する論文と異なる点はあるのか。
・学位論文を英語で書く場合と日本語で書く場合の構成の違い。
・Guide line for the usage of table and figure is most effective.
・投稿論文の書き方で述べたような基礎的な部分を主に講義していただきたいです。
・最低限必要な項目などあれば知っておきたい。

1. Specific format to follow in writing a thesis.

・論文作成のペース（提出までにまとめあげられるか不安だから）
・要点をつかんだ文章の書き方（内容が大きくならないか不安だから）
・フォーマット程度が分かれば良いのでセミナーでなくても良いかもしれない。
・投稿論文との違い
・投稿論文と学位論文の違い
・これだけは気を付けなければならないといった点について知りたい。
・あとは学位論文全体の書き方の例なども示していただけると参考になります。
・学位論文と投稿論文の書き方の違いなど
・投稿論文や修論との違いなど。
・I want to know how organize chapters and improve the quality of the thesis.

・良い学位論文とあまり優れていない論文の違いとか・・・、初めて取り組む者にとってはどのようなことでも参考になると思います。

・構成や作成手順など
・how to make a good outline for thesis.

・基本的な事項で申し訳ありませんが、学位論文と投稿論文と違う点を教えていただきたいです。投稿論文同様、作成フローや書式等、基本的な事項を確認したいです。

・How to write effective sentence and paragraph, how to display data thus easy to understand.

structure and function
how to combine the papers in thesis
font letter
cite information
etc

・良い例、悪い例とその理由

・I think it would be more helpful to upload the information of detailed format of master and doctoral thesis with the contact of person in charge. The information uploaded in the web site is not enough to let us know the format of thesis of UGAS IWATE RENDAI.Also, it would be helpful to make students can easily download thesis of senior students.

・手続き方法について。文章だけでは提出漏れがありそうで心配。学生だけでなく、教員にも把握してもらうべき。特に初めて博士を指導する教員向けにも。

・tips on writing the discussion and conclusion part.

・学位論文に求められるレベル、書き始める前に準備しておくべきデータや資料の整理法（参照論文や文献の記録整理、統計資料の引用パターンなど）、3年間のスケジュールの立て方、類似分野の先輩の方の実践例など

・これまでの学位取得者のD論作成および関連する実験等データ収集などのタイムスケジュールを知りたい。

・学位論文が受理されるまでの流れと要する期間
・必ず必要なもの、省略可能なもの

・論文構成について
・The demands on format details.

設問11　Q7　論文に関するセミナーを開催する場合，希望する開講時期はいつ頃ですか？

いつでもよい		25
下記の時期がよい		16
回答例	8月	2
	10月	2
	11月以降	2
	冬季	3
	2月or 3月	1
	できる限り早く	3
	期初	1
	卒業1年前	1
	2015年冬までに	1

設問12　Q8 「論文の書き方セミナー」以外で、こんなセミナーを開催してほしいという要望がありましたら、具体的に書いて下さい。

・今のところありません
・I think a seminar about research literature review writing is helpful for student

・論文等の個々人の作業のセミナーではなく、合宿形式の交流をもっと増やした方が良いと思う。繋がりが増えた結果、共同研究に繋がる場合も多いため。

・International conference
・かなり漠然としていますが、博士の学位を持っているが研究職以外の職に従事している方のお話を聞いてみたいです。
博士の学位を取得後，意外な進路に進んだ方　など

・各大学で使用可能な分析機器やその使用例についてセミナーがあれば聞いてみたい。
・スライド作成や、ポスター作成などの講習もあれば、参考にしたいです。

・科研費の申請い関するセミナー。学生の間は申請できなが、研究者になれば誰しもが申請するものだと思う。どのようにして研究費を獲得していくのか、自身のアイディアを他者にどのように伝えるべきなのか、自分の研究室以外の先生から知る機会があれば教えていただきたい。

・I hope UGAS can ozganize some activities for our classmates to communicate with each other face to face. I also hope UGAS can invite some famuas scientists (e.g. Japanese nobel prize winner) to give us lectures.

・Lecture about how to do presentation in Japanese for international students.

ポスドクでの研究生活
実際に大学教員になったひとの話
論文数とか

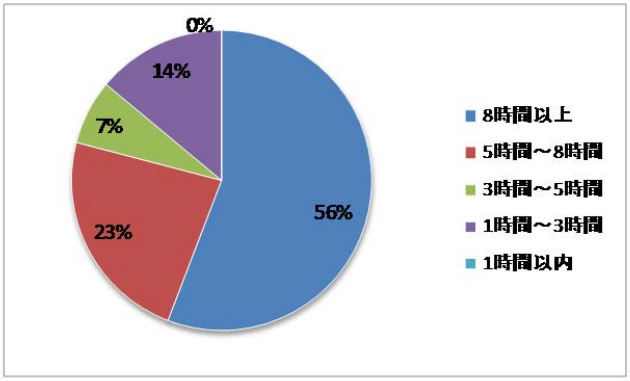
(1) how to make good presentation by powerpoint
(2) How to be a good presenter

・seminar related 'how to get a job or apply in Japan (or other countries) as a graduate students' might be interested
・校費の使い方など事務的なマニュアル、文献探し、図書館の活用法

・博士課程の学生向け就職活動の進め方
・上手なプレゼンテーションを行うための講習会
・国際学会や海外の研究機関へ行くために必要なこと、準備すべきこと

設問13　Q9　あなたは大学での研究時間を含めて、1日当たりどのくらい学習をしています か。(いずれか一つ)

8時間以上	24
5時間～8時間	10
3時間～5時間	3
1時間～3時間	6
1時間以内	0



設問14　Q10　その他，連大に対する意見や要望があれば，具体的に書いて下さい。

・事務の対応には満足しています。一方で、学生主体の研究をもっと行えるように、学生向け研究費の拡充や公募型研究費の情報公開をもっと積極的に行って頂けると助かります。岩手大学の博士は「なんとなく」博士に進学し、そのまま修了してしまうケースが多いように感じるので、修士の延長ではなくなるような経験を積ませる必要があると思います(研究費獲得、共同研究等)。そのためにも、他大学や研究機関(生工研等)との連携した公募型プロジェクトを連大発信で企画しても良いように感じます。前述した内容は本来博士の学生が主体的に行うべきです。しかし、受動的であっても、潤沢な経験を持った博士が一定期間ごとに研究室に居れば、その都度研究や教育のレベルも向上するのではないでしょうか。

・連大学生プロジェクトのような研究費申請の機会を増やしていただきたいです。

・可能であればセミナー開催日を集中していただけると参加しやすいです。

・I suggest that UGAS should develop a guide or a specific format of thesis that students should follow. For example the font type and size to be used, format of the title page, major parts of the thesis chapter, reference format, etc.

・連絡事項等はメールで把握できているので、ありがたいです。
事務局への提出書類について、社会人入学ということもあり、よく分からないことが多いのですが、電話で相談するととても親切に教えて下さるので助かっています。畜大での学部・修士時代は、学務課の職員のかたも対応に余裕がないという感じで、相談に行きづらかったのが正直なところです。今後ともいろいろとお世話になると思いますが、宜しくお願いします。

・充実した研究生活を送ることができているので、今の環境に満足しております。

・学割証を配属大学で印刷できるようにしてほしい。

・I hope we can obtain some guidelines from our vice supervisors.
・Nihon go no benkyou for academic communication.

・UGAS should have more activities by which japanese students and international ones have more chances to communicate and learn from each other. we are here not only learn science knowledge but also want to learn the different ways of thinking in life from different nations. that is important I think.

・I would like to suggest one thing, politely. I think the graduate student, especially phD students need support from university or scholarship foundation even they exceed their grade. The qualification of graduation of IWATE RENDAI is not that strictly difficult but it is actually not enough to succeed in the competition of nationwide or worldwide level. Sometimes it is necessary to delay receiving phD degree to strengthen the competitive power and carrier. In this situation, it would be very helpful to gave them a chance to apply extension of scholarship or support from the institution (university or scholarship foundations) that has been supported the student.

・指導教員を通じてしか学生の進捗状況の把握がされていないと思いますが、担当教員が多忙でなかなか相談ができない場合、基本的に自己責任とはいえ誰に相談してよいのか、不安な場合があります。

・いつもお世話になっております。ありがとうございます。
・Feel very well. Thank you so much for the support!

資料８

実践統計学（日本語）受講者アンケート結果

講義実施日：平成２７年１２月１日
アンケート実施時期：平成２８年１月１８日～平成２８年２月５日
アンケート対象者　：平成２８年度受講者　計１４名（うち日本人１２名（社会人９名）、留学生２名）
回収数･回収率　　：　１１（78.6%）　日本人１１（91.7%）（うち社会人８名（88.9%））、留学生０名（0%）

１．講義に対する満足度についてお答えください

満　　足	４（３６％）	日本人４（３６％）（うち社会人３（３３％））
やや満足	７（６４％）	日本人７（６４％）（うち社会人５（６７％））
やや不満	０（　０％）	日本人０（　０％）（うち社会人０（　０％））
不　　満	０（　０％）	日本人０（　０％）（うち社会人０（　０％））

２．どのような点が不満でしたか？

・講義内容のレベル（難易度？）が講師によって幅があり、理解できたところとさっぱりわからないところがあった。今後もオムニバス形式で講義を実施するならば、おおよそで良いので先生同士で内容、難易度を調整して欲しい。

３．講義の改善点

（１）講義の開催時期

１．適切である	１１
２．開講時期を変更した方が良い	０

（２）講義の開講の仕方

１．年に１回の集中講義（今年度と同じ）	１０
２．年に２回の集中講義	１
３．その他（下記に具体的に記入してください）	０

（３）その他、改善点など

・内容がかぶっているところがあるのでそこを改善していただきたい
・事前に相談できるのが、研究の直接の助けにもなってよかった。複数の先生方で講義を行う場合は、事前に先生間で役割分担の確認などの打合せがあった方が、講義の内容が重複したりせず、よいのではと思った。
・①担当教員による個別の事前指導→②全体の講義という形式は、とても有難かったです。自分の実験データを統計処理する際に、とても参考になりました。
・講師の先生もおっしゃっていたのですが、講義内容を事前に分担できると重なる部分などがなくなるかと思います。
・講義内容について、事前に講師の先生方ですり合わせをすべきではないかと思います。内容が重複していると、せっかくの統計を学ぶ機会であるのにもったいないと感じた。

実践統計学（英語）受講者アンケート結果

講義実施日：平成２７年１２月１６日
アンケート実施時期：平成２８年１月１８日～平成２８年２月５日
アンケート対象者　：平成２７年度受講者　計８名（日本人１名（社会人０名）、留学生７名）
回収数・回収率　：　５(62.5%)　日本人０(0%)(社会人０(0%))、留学生５(71.4%)

１．講義に対する満足度についてお答えください

満　　足	４（８０％）	留学生４（８０％）
やや満足	１（２０％）	留学生１（２０％）
やや不満	０（　０％）	留学生０（　０％）
不　　満	０（　０％）	留学生０（　０％）

２．上記の満足度を選択した理由はなんですか。

・I understood more deeply about the statistic analyses which we normally analyze by software without understanding what is the principles of the software. It is nice（統計学について、より一層理解を深めることができた。講義を受講する前は、統計分析はソフトウェアを使用するだけで、その原理や内容を理解しているわけではなかったため、とても良かった。）

３．講義の改善点

（１）講義の開催時期

１．適切である	5
２．開講時期を変更した方が良い	0

（２）講義の開講の仕方

１．年に１回の集中講義（今年度と同じ）	1
２．年に２回の集中講義	4
３．その他（下記に具体的に記入してください）	0

（３）その他、改善点など

・I think that's ok（okだと思います）
・Maybe if sensei could introduce some popular statistic software, it would be nice.（統計学用のソフトウェアをいくつか紹介してくれればよかった）

専攻別科学特論受講者アンケート結果

講義実施日：
【生物生産科学特論】平成２７年７月２１日～７月２２日
【生物資源科学特論】平成２７年７月２３日～７月２４日
【生物環境科学特論】平成２７年１２月１４日～１２月１５日
アンケート実施時期：平成２８年１月１８日～平成２８年２月５日
アンケート対象者　：平成２８年度受講者　計３３名（うち日本人２２名（社会人１３名)、留学生１１名）
うち生物生産科学特論　１３名（うち日本人１０名（社会人７名)、留学生３名）
生物資源科学特論　１６名（うち日本人１３名（社会人８名)、留学生３名）
生物環境科学特論　１２名（うち日本人６名（社会人４名)、留学生６名）
回収数・回収率　：１０（30.3%）　日本人６（27.3%）（うち社会人６名（46.2%))、留学生４名（36.4%）
うち生物生産科学特論　４、生物資源科学特論　５、生物環境科学特論　３

１．講義に対する満足度についてお答えください

満　足	６（６０%）	日本人４（６７%）（うち社会人４（６７%))、留学生２（５０%）
やや満足	２（２０%）	日本人１（１７%）（うち社会人１（１７%))、留学生１（２５%）
やや不満	２（２０%）	日本人１（１７%）（うち社会人１（１７%))、留学生１（２５%）
不　満	０（　０%）	日本人０（　０%）（うち社会人０（　０%))、留学生０（　０%）

２．どのような点が不満でしたか？
・４名の講師の講義内容に関連性がない。（１名）
・講義の開講時期に不満がある。（１名）
・講義が連続した日程で開催されている。（１名）
《自由記述》
・Actually all lecturers have good knowledge　and good slides , contents of lectures. what I was not satisfied was english only.　Poor English may make lecture　less interesting.
（講師は皆知識が豊富で、講義内容も講義資料も問題なかったが、講師の英語力にだけは満足できなかった。講師の英語力が上がればもっと面白い講義になると思う。）

３．講義の改善点
（１）講義の開催時期
１．適切である　9
２．開講時期を変更した方が良い　2
（冬期間（１０月～２月）を希望、１２月から２月を希望。）

（２）講義の開講の仕方
１．年に各１回の集中講義（今年度と同じ）　9
２．年に各２回の集中講義　1

（３）その他の改善点
・Taking the response from students (two way direction teaching) system is better than one way direction (only from teacher to student).　（一方通行の講義の仕方より、学生との意見交換を多く取り入れるようにした方が良い。）
・(1) English Speaking skills. (2) Face to face lecture will be preferable. we

can discuss more. （１つは、講師の英語力。２つ目は、学生との意見交換を取り入れた講義の方が良い。もっと議論できるようにしてほしい。）
・Power point in English（講義スライドの英語をもっと改善してほしい。）
・課題提出日が、事務局と講師の先生が把握しているものと違ったのですり合わせられると良いと思います。

資料９

平成 27 年度　修了生アンケート結果

アンケート実施時期	：平成２７年９月及び平成２８年３月
アンケート対象者	：平成２７年度修了者　計 26 名(うち日本人 14 名(社会人 7 名)、留学生 11 名)
回収数・回収率	：25 名(96.2%)　日本人 14 名（100%）(うち社会人 7 名)、留学生 11 名（91.7%）

１．岩手連大で学べてよかったと思うことは何ですか？具体的に書いて下さい。
（別紙：自由記述一覧）

２.「こういう講義があればよかった」等、岩手連大の講義やカリキュラムの改善点について、具体的に書いてください。
（別紙：自由記述一覧）

３．下記の①～⑤について、あなた自身の達成度を自己評価してください。

①研究遂行力：

農学とその周辺分野にかかわる専門分野で、学術の発展に寄与する研究に従事し、自立して研究を遂行できる。

１）十分に達成できた。	7（留学生 2、社会人 2）
２）ある程度達成できた。	18（留学生 9、社会人 5）
３）あまり達成できなかった。	0
４）ほとんど達成できなかった。	0

②学際的思考力：

幅広い分野の研究者・技術者との交流を通じて学際的な視野で知識を習得することができる。

１）十分に達成できた。	8（留学生 4、社会人 2）
２）ある程度達成できた。	15（留学生 7、社会人 5）
３）あまり達成できなかった。	2（留学生 0、社会人 0）
４）ほとんど達成できなかった。	0

③異文化コミュニケーション力：

異分野、異世代、異国の人々と信頼関係を築きながら相互理解を深めるためのコミュニケーションを図ることができる。

１）十分に達成できた。	11（留学生 8、社会人１）
２）ある程度達成できた。	9（留学生 3、社会人 3）
３）あまり達成できなかった。	4（留学生 0、社会人 2）
４）ほとんど達成できなかった。	1（留学生 0、社会人 1）

④研究成果発進力：

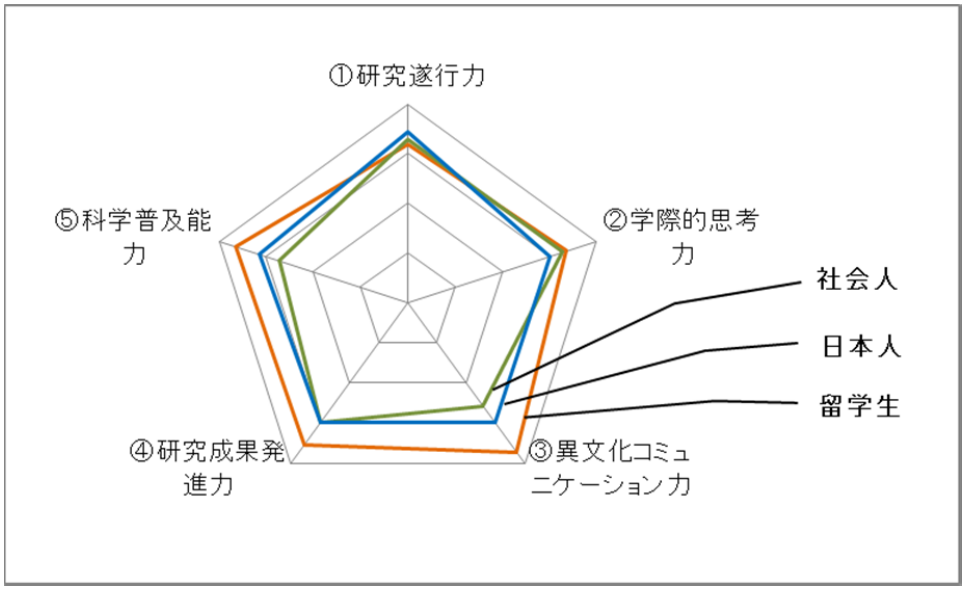
研究成果をとりまとめ、研究論文等の形で広く国内外に公表することができる。

１）十分に達成できた。	8（留学生 6、社会人 1）
２）ある程度達成できた。	15（留学生 5、社会人 5）
３）あまり達成できなかった。	2（留学生 0、社会人 1）
４）ほとんど達成できなかった。	0

⑤科学普及能力：

研究者・専門家だけでなく、学部学生や一般市民に対しても自らの専門分野の研究について、わかりやすく伝え普及することができる。

1）十分に達成できた。	10（留学生 7、社会人 0）
2）ある程度達成できた。	12（留学生 4、社会人 6）
3）あまり達成できなかった。	2（留学生 0、社会人 0）
4）ほとんど達成できなかった。	1（留学生 0、社会人 1）



別紙

1 岩手連大で学べてよかったと思うことは何ですか？

社会人で入学したが、配属先の大学の研究室で学生が行っている研究内容が自分の職場での研究課題と異なっており、興味の対象が広がった。
As UGAS student, I enjoyed my doctoral study. I got not only academic experience but also social and international experiences. For example, in Science communication camp, I had friends of different ages, from various academic and carrier surroundings. It is always interesting to listen lecturers and talks from different people who are good at their jobs. And I believe that what I learnt in UGAS supports my carrier and makes my future bright.
これまで行ってきた自分の研究を納得できるまで高めることができた。具体的には博士課程在学中に英語論文が3報受理されるとともに、日本家禽学会の優秀発表賞を受賞することができた。また、それらの成果が認められ、研究者としてのスタートラインに立つことができた。これも岩手連大で得られた成果の一つである。 また、連合大学院ならではの特徴として、岩手大学のみならず、帯広畜産大学、弘前大学および山形大学の学生および教員とコミュニケーションが取れる環境であったことも有意義であった。特に、科学コミュニケーションでは専門も経歴も異なる者同士でディスカッションを行い、幅広い意見を耳にすることができたことは大変素晴らしい経験となった。
連合大学ということで、複数の大学の先生に副指導、副査になっていただいたことで多数の先生とお知り合いになることができました。決して自身の専門分野の方々ではありませんでしたが他分野のお話も伺うことができとても楽しかったです。

今行っている実務と研究内容が一致しているため、研究の成果を直接実務に反映させることができた。岩手連大は、研究課題の自由度の高さから自分に合った研究ができた。その結果、実務時の疑問や問題点の多くを解決することができた。実務の現象から起きる「なぜ」を科学的な理由で理解できたことは大きな財産となった。
岩手連大で学べてよかったと思うことは、教師の知識および研究資源が多いことだと思います。 4 つ大学において沢山の優秀な先生たちが就職しているので、先生たちから色々な知識や研究内容を教えて貰え、自分の専門知識を多く勉強しました。また、他の専門の先生と接することで、科学的な考え方もより高めることができました。自分の研究だけで注目することではなく、他の分野も注目する方が、自分の研究に進められると感じました。
a. My internship at University of Saskatchewan and being able to work on a different research study is one of the rewarding experience as doctoral student of UGAS. b. Participating in the science communication camp and being able to communicate and collaborate with fellow students and experts in different research field is an excellent and rewarding experience. c. Ultimately being able to present paper in international conferences is very rewarding and motivates me to do communicate my research to colleagues and experts in my field of interest.
・科学コミュニケーションや学位論文審査にあたり、他大学の先生方や学生（留学生）含むつながりを作ることができたこと。 ・新たな試験を実施した経験。
まず、広い地域での連合大学であることで様々な場所に在籍する先生方や学友と出会えたことが一番嬉しいことでした。私も社会人学生として在籍させていただきましたが、学友は年齢も国籍も幅広く、交流することで多大な刺激を受けました。サテライトによって様々な大学の先生方の講義が聴けたことも大変貴重な経験でした。宿泊を伴うコミュニケーション演習は特に楽しく印象に残っています。英語の授業も大変ためになるもので、プレゼンテーションのコツを分かりやすく細やかに教えていただきました。事務室の皆様も丁寧で暖かくサポートして下さり、安心して学生生活を送ることが出来ました。ありがとうございました。
岩手連大で学べてよかったと思うことは 1)親身になってくれる先生が殆多くいらっしゃって、相談しやすいです。ストレスがたまった時や研究のことについて、自分の指導先生だけではなく、他の先生にも相談ができて、すごく励まされました。 2)様々な情報のお知らせが速いです。連大の事務室からよく奨学金や授業関係などのメールを頂いています。事務室のスタッフの対応もとてもよいです。 3)4 つの大学の連合なので、科学コミュニケーションの授業などで、岩手大学以外の学生とも交流ができて、すごく勉強になりました。
岩手連大で自分の専門研究だけではなく，他の学者たちとの交流により，見聞を広めることが非常によかったと思います。岩手連大は岩手大学，弘前大学,山形大学および帯広畜産大学の連合により設立されたため，「科学コミュニケーション」により，皆を集まり，自分の研究内容をプレゼンテーションしながら，ワークショップを通して，参加者全員で交流の機会を作り，研究者としてのコミュニケーション能力をアップし，自分の専門以外の分野についても見聞を広めることができました。
学部卒業後は社会人を長年経験し、研究の世界の常識的なことやマナー、論文とは何ぞやという基本的な部分を学べたこと。特に、科学英語の講義では論文の構造、表現方法やプレゼンの基礎などをグローバル・スタンダードで知ることができたので、自然科学・社会科学を通じた研究者としての立脚点を学んだ。また、所属の研究室で学生のゼミ指導の経験も、自分の研究を客観的に見ることの訓練になったと思う。
各構成大学の教授から指導を頂いて計画した年数で研究が行えたことです。毎年行われる進捗報告の他にも、関連学会など様々な機会で教授の方々と研究についてコミュニケーションを取れたことが複数大学で構成された連大のメリットだと思いました。また、海外発表において、単位が取得でき、旅費ができる「国際学会コミュニケーション」では海外発表の支援をしていただき感謝しています。また、や「連大学生研究プロジェクト経費」や RA 制度では研究のスピードに関わらず研究資金も含めてモチベーションを保つことができました。
まず、岩手連大内はいつもきれいで、居心地が良いです。研究室も広くて、使いやすいです。プリンターなどの設備が充実しており、研究が進めやすい環境であると思います。 また、事務室の方もとても優しく、授業料免除の手続きの説明など、何でも相談にのって下さるので、いつも心が暖かく感じました。 そして、一番大事なのは、自分が希望する指導教員の先生のもとで、研究の指導を丁寧に受けることができた点です。

私は工学部出身で、現在の職場に就職してから業務（技術分野）が農学分野に変わったものの、依然工学的な色彩が濃い分野であったため、工学的な視点を常に持ち続けて仕事をしてまいりました。したがいまして、逆の見方をすれば、研究者としての視野が若干狭かったと思います。ところが連合大学院に入学しますと、自分の研究を進めるばかりではなく、講義などで農学全般にわたる幅広い知識を吸収できる機会に恵まれ、格段に視野が広がったと感じております。結果として、自らのドクター研究の内容にも生物学的な視点からの解析や考察を加えることができました。
配属先の大学のみではなく、他の構成大学に所属する博士課程の学生とも交流する機会があり、研究を続ける上で重要なネットワーク構築ができた。 また、他分野との関わり合いが生じるため、自身の分野のみではなく幅広い分野に触れられることもメリットだと感じた。

２．「こういう講義があればよかった」等、岩手連大の講義やカリキュラムの改善点について、具体的に書いてください。

いろいろな書類を word 文書で作成するよう指示されたが、枠内に記入する場合などに文字が予想外の位置に移動したりして作業がしづらかった。もっと簡単な書式で様式を作成できないでしょうか。 居住地の都合で配属大学ではない大学で講義を受けたり報告会を行うことが多かったので、休憩時間に利用できる控え室のような部屋があればよかったと思います。
I believe it is good already.
十分な教育を受けたと考えている。 個人的には統計の授業を受けたかったが、都合が合わず断念したのが残念である。統計学は多くの研究分野で必須の学問であり、実験計画法などの授業を通して、自分自身で研究を計画・立案する技術を身につける良い機会になると考えた。 付随して、特別研究員や科研費の申請フォーマットを利用した、研究の提案方法などを学ぶ機会があっても面白かったかもしれない。
インターンシップとは別に他の大学、研究機関に訪問できる仕組みがあると人脈をつくりやすいなと思います。
卒業後、「研究者への道」だけではなく、実業家？になるためのカリキュラムがあれば面白いと思います。工業系の大学は多くの企業や研究所への就職先があるが、農業系の就職先は限定されてきます。大学での学びを社会へ貢献するためには、自営での農業経営も一つの道だと考えます。そのためのステップなどあれば、面白いと思います。
今まで、「研究インターンシップ」という教育プログラムが実施しています。自分の研究室を飛びだして他機構の研究員や教員たちと意見交換を行い、非常に良い教育プログラムだと思います。しかし、実施機関や受けられる学生の人数が少ないことは問題点である。これから、博士課程の間に自分の副指導先生の研究室に 2 週間程度で研究交流（実験、研究発表、交流など）を行う講義があれば、この問題点は少しい改善されると思います。
Lecture/ practical class on writing thesis and journal articles would improve student's chance to publish many papers. If I may suggest this should be taken on the second year of the doctoral degree or on a time that students have much data collected that they can use for writing a paper. A publishable paper should be a requirement to be able to pass this course. This will serve as an additional venue for mentoring students to write a publishable article.
・科学コミュニケーションにおける、留学生への配慮。 （発表が日本語であるため、理解しづらく、伝えづらいとの意見を聞いた。）
私からは特に改善希望はありません。社会人学生でしたが授業時間も就業と並行して行える範囲でした。自分の分野の講義を受けるというのは博士課程の学生にとっては余り求められていないかと思います。それよりも未知の、広い分野の講義を拝聴することは本当に楽しく、質問できることに喜びを感じていました。私的な事情で叶いませんでしたが、余裕があればもっと講義を受けたかったです。
連大で博士課程を学んでいる学生同士や先生方との交流会がもっとあればよかったと思います。博士課程を取得する際に、研究の進みぐあいや将来の進路などにストレスを感じる学生は少なくないと思うので、専門や学年に関わらず、様々な交流会を通じて、情報交換や異分野知識の習得だけではなく、リラックスな雰囲気で互いに励まし合うこともできると思います。
できれば「科学コミュニケーション」の以外にも，4 つ大学の学生の交流の機会が増えればいいかなと思います。研究や進路などについての悩みや経験などは年齢が近い同級生や先輩と交流することによって，アドバイスをいただき，効果的ではないかと思います。

自分の分野は農学系としては異色だったので、具体的な論文内容の検討や既往研究の調査などでは指導教官以外に誰にどう相談していいかわからず、ほぼ独学に近かったので大変苦労した。本来であれば公共政策学などのコースがあれば、類似の分野の研究者ともっとディスカッションができたと思う。今後の岩手県の地域振興の観点からは、自治体公務員や公共的団体、NPO等の人材育成が不可欠であり、その点では他県に比べ、大学教育に工夫の余地があると考える。県立大学との役割連携も含め、『ものづくり』にとどまらない、地域政策の分野を充実する手立てを講じていくことを期待したい。
改善では無いが、「研究インターンシップ（サスカチュワン大学）」に参加したかったと後悔しました。一年延長してでも行きたいと思いました。
特にこういう講義があったほうがいいと思うのはないですが、しかし科学コミュニケーションのような、同じ専攻ではなくても同じく院生の方々と研究について交流できる、コミュニケーションがとれる講義がもっとあればいいなと考えています。
「科学英語 B」はとてもよかったと思います。自分はほとんど英語を聞き取れないし話すことも下手なため講義についていくのがかなり大変だったのですが、後に英語で論文を書く際に、講義の内容が非常に役に立ちました。「実践統計学」に関して、講義そのものは難易度がかなり高い印象でした。しかしながら、自分の研究において統計解析で困ったことを最寄りキャンパスの統計に詳しい先生に相談し、指導まで受けられるというのは、とてもいい制度だと思いました。実際に私の場合、山形大学の安中先生にご指導いただき、研究データを効率的に整理することができました。 今後も、「科学英語 B」や「実践統計学」は、続けてもらいたいと思います。
・論文の書き方～投稿・受理までのコツ 他分野の講義等も良かったが、研究する力を伸ばすのみではなくカタチにする力を伸ばすような講義があると、なお良いと感じた。 ・研究に関する議論 科学コミュニケーションのような他大学との研究発表を通した学生間交流はもっとあったほうが、研究に対するモチベーションも効率よく上げていけるのではないかと感じた。

６．代議員を経験して

必ず来る春

植物生産学連合講座　平　　智（山形大学）

学部卒業を経てマスターコースの修了までなら順風満帆の歩みを進める学生も少なくないと思うが、ドクターコースまでやり遂げるとなれば、たいていの人は多かれ少なかれいわゆる「デッドロック」にぶつかることだろう。基本的には、それ（ら）を自ら乗り越えてこそドクターということになるが、苦しい時期に、ちょっとずつバックグラウンドの異なる複数の指導者から助言を得ることができるのはすごく恵まれた環境である。連大の指導体制はまさにそれを具現化したものだといえるだろう。少しくらい後ずさりしても、しっかり前を向いていれば、必ずそこに春はやって来る。北国にいると、そのことは身を持っても実感できる。学究の春と季節の春の到来を、学生とともに祝福できるのはとても幸せなことだ。

北国に位置する４大学が強力かつ親密な連携を結んできた岩手連大であるが、帯広畜産大学の離脱（予定）表明を受けて連合講座再編の必要性が浮上している。積み上げてきたものをいったん壊すのは勇気のいることだが、未来に向かって知恵を絞ればきっと名案が浮かぶだろう。次の春は必ずやって来るのだから…。

連大代議員１年生

動物生産学連合講座　喜多一美（岩手大学）

昨年の２月に、突然、比屋根研究科長から連大代議員への就任を依頼されました。連大代議員の任期は２年間なので、時期的におかしいと思いましたが、話を聞くと築城代議員の研究科長補佐就任に伴い、その残任期間を務めるための依頼でした。昨年度の 11 月に、上村前研究科長の依頼を受け、数名の教職員の方々と共にカナダのサスカチュワン大学を訪問し､動物科学分野におけるデュアル･ディグリーに関する打合せを行ったこともあり、何かのお役に立てるかもしれないと思い任期１年間の連大代議員を引き受けることにしました。ところが、その直後に岩手大学の副学長に就任することになり、連大代議員としての仕事の多くを他の代議員の先生方にお任せすることになってしまいました。ここで、この場をお借りして、他の代議員の先生方に厚くお礼を申し上げたいと思います。

４月からは第３期中期目標・中期計画期間に入り、岩手大学大学院連合農学研究科も改組を実施することが確定的となりました。しかも、準備期間は長くありません。今回の改組では、私が所属する動物生産学連合講座が最も大きな影響を受けることが予想され、将来像を慎重に考える必要性があります。国立大学を取り巻く環境は極めて厳しい状況ですが、岩手連大が少しでも良くなるように、微力ながら協力したいと考えております。たった１年間の代議員でしたが、事務方を始めとする皆さんには大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

連大って、「いいね！」

動物生産学連合講座　松﨑正敏（弘前大学）

2年前、連大の代議員担当のご依頼を承りました。その数年前から何かを依頼されたら、基本的に何でも引き受けすることにしていたので、どんな仕事をするのかも知らずに、連大の代議員も二つ返事で引き受けました。それから、何の用務よりも最優先の連大関連の出張の日々が始まりました。もともと、帯広や山形、岩手の学生の学位審査会に、第3番目の大学所属の審査委員としてお招きいただく機会が多く、連大といえば、強制的に日常から隔離してくれる出張というイメージでしたので、代議員としての出張も楽しく旅行させていただきました。代議員の任期中には、サスカチュワン大学とのデュアル・ディグリープログラムをアニマルサイエンス分野にも拡充しては、と云うことで、サスカチュワンへの出張にも行かせていただく機会に恵まれました。また、代議員としての２年間、連大の業務に関わらせていただいたおかげで、連大のしくみや流れを学ぶことが出来たように思います。代議員が何かを主体的に仕事をするというよりは、研究科長や研究科長補佐の用意された案件の審議に加わるとか、分担された業務をこなすといった関わり方でしたので、あまりストレスを感じることなく業務に関わらせていただけたように思います。たまたま、代議員を務めさせて頂いている期間にも、主指導担当学生が途切れることなく在籍していましたので、連大の業務に切実な思いで取り組めたのかもしれません。任期中のエピソードのような思い出ですが、当時の研究科長の上村先生が帯広での代議員会に引き続いて、定山渓温泉かどこかでの学会か研究会に参加されるとかで、慌ただしく出発されて行きました。そのアクティブさがとても印象的でした。それ以後、私も色々な学会に前向きにフットワーク軽く出かけるように努めるようになりました。

連大のおかげで、いろいろ勉強させて頂きましたし、第一、連大生が研究室に在籍していると、予算的にも研究室の活気という意味でもプラスになっています。そんなわけで、総合的にみますと、私にとって、連大って「いいね！」という感じです。

2年間を振り返って

生物制御学連合講座　小池正徳（帯広畜産大学）

岩手連大の副指導教員の資格を得てからほぼ20年、3年後に主指導の再々審査を迎える報せも届いておりますが、このたび帯広畜産大学が岩手連合大学院から独立することが大学の方針として明らかになりました。もとは連合大学院設立時に「うち（帯広畜産大学）は独立で博士課程を作るから」と最初のお誘いをお断りし、博士課程設置は無理とのことになり、お詫びをして岩手連大に参加させていただいたことを諸先輩方から聞いておりました。その件があるのに、このたびの独立に至った件に関しましては大学の決定とはいえ、非常に寂しく感じております。とくにこの件に関しましては比屋根研究科長をはじめ岩手大、弘前大、山形大の代議員の先生だけでなく構成員の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

さて、2年間の代議員のうち一番印象に残ったのは今年度帯広で開催された「科学コミュニケーション」でした。企画の段階から面白いものにしようと5人（3人教員、2人事務官）で何回もミーティングを開いて話し合いました。実際、進行役を務めさせていただき、セミナー発表のための話し合い、セミナー発表、実習の時の作業等、参加した学生さん方

の目の輝きを今でも思い出します。

次に印象に残ったのは指導教員の審査でした。毎年２回あったものが１回になり、代議員会のこの議題が一番シビアだったでしょうか、初年度も次年度も非常に議論が多く、まだ問題点が残る案件でした。次期の代議員の皆さんでその基準をより良くよりクリアにしていただきたいと思います。

そして、先日訃報があった山形大学の小山先生、昨年の新年の集まりにお隣にお座りしていろいろお話を聞かせていただいたのがまだ昨日のように思い出されます、ご冥福をお祈りいたします。最後に、この２年間、最初の１年は上村研究科長、２年目は比屋根研究科長をはじめ代議員の先生方、岩手連大事務局の皆さま、大変お世話になりました。そして、今後ともよろしくお願いいたします。

代議員を経験して

生物機能開発学連合講座　橋本　勝（弘前大学）

2014 年 4 月 から 2 年間岩手大学連合農学研究科の代議員を担当しました。代議員になって初めて連大運営を考えるように なった訳ですが、岩手連大では、学生へのサービスにとても重きを置いていることを実感しました。全体的な予算減が主原因かとは思いますが、前述の学生サービスも要因となり、指導教員に配分できる研究経費が圧迫されていたのも事実です。年々第一指導教員への研究費配分が減少し、今後の学生指導に重大な障害が予想されるようになりました。代議員任期中に、主指導教員、第一副、第二副指導教員への経費配分の修正を行いました。

大きな責任と負担を持つ主指導教員に研究費を確保するため、また複数の博士学生を指導する教員に十分な活動を行っていただくためです。岩手連大も年々予算削減を受けており、残念ながら今回の改正で、副指導教員への配分は減額せざるを得ませんでした。代議員会で何度も議論し、現地点での最良の選択に至ったと考えております。代議員として連大経営して、博士課程教育についてさまざまな視点から考える機会を得たと思いました。

教員として活動していて、岩手連大の素晴らしい点として 150 人を超える教員と関わる機会が頻繁にあることがあげられます。連大にはさまざまな分野の研究者がいます。私自身、連大活動を通して実際に共同 研究もはじめることができました。独立の博士課程では到底考えることができないことです。今後も岩手連大が発展し、個人的にもその恩恵を享受していきたいと期待します。

代議員２年間の感想について

ゲノム工学連合講座　千田峰生（弘前大学）

私は弘前大学３人目の代議員という、とても影の薄い存在でした。唯一存在感を示したのが、「わんこそば」と「（紅葉館での代議員会の際）おいしい朝食をゆっくり食べすぎて帰りのバスに乗り遅れたこと」だけという情けない状況でした。しかしながら、大体２ヶ月に一度、盛岡を中心に、帯広、鶴岡も訪れ、連大の運営を垣間見ることができたことはとても良い経験でした。私のような者が代議員を務めることができたのもひとえに連大科

長、事務の方々ならびに他の代議員の皆様のご指導のおかげです。２年間本当にありがとうございました。岩手連大の今後ますますのご発展を心より祈念いたします。

代議員を経験して

ゲノム工学連合講座　豊増知伸（山形大学）

2 年前、山形大学の岩手連大の代議員の一人には佐藤英世先生が選ばれる予定であったが、佐藤先生の他大学への転出によりゲノム工学講座の私が替わりに選ばれた。急転直下な出来事で、既に平成 26 年の科学コミュニケーションの鶴岡開講の準備が進んでいたところに平先生と小山先生と合流することとなった。岩手連大では、10 年くらい前までに私の直接指導した 4 名の学生が博士号を取得させていただいたが、当時の私には主査資格がなかったことから、主査は別の山形大の主査教員にお願いしていた（最近は博士課程進学の指導学生はいない)。しかし実質的な学生の研究指導の経験はあったものの、運営については無頓着で、ゼミナール制から単位制に変わったときもほとんど意味を理解できないくらいの状況であった。このようにほとんど岩手連大とは縁遠かった私が代議員になったわけで、当初は周りが見えず、会議に出席するごとに状況を把握していくことに精一杯であった。ほぼ 2 ヶ月に一度の出張会議で、つらくはあったが、最近ようやく周りがみえてきて、たいへんよい経験となった。大学の会議・運営とは異なり、岩手連大の会議・運営はすっきりしていて心地よかった。しかし、一つの組織としての運営のはずが、実質的には異なる組織の運営とすり合わせなければならないなどたいへんなところもみることができた。

私の研究領域では、危険物薬品の使用、組換え DNA 実験など教員による管理・監督が義務付けられて学生だけで行わせるわけにはいかない実験がほぼ毎日行われる。さらに数時間毎の実験の作業を積み上げて数年がかりで一つの論文にしていく私たちの研究分野では一日 10 件くらいの学生からの途中経過報告と相談が舞い込む。というわけで、会議・出張などで教員不在となることは学生に迷惑をかけることとなる。私の学生時代は、教授、助教授、助手の体制で、教授の先生は毎日運営で忙しくラボにはいないことが多かったが、助手の先生はずっとラボにいてくれたおかげで、毎日いつでも相談やディスカッションができたことが自分にとっては宝であった。このようにラボ内で複数の教員による運営と実験指導の分業がなされていた。

ところが昨今、教員削減、学部改組などにより、地方大では会議運営で忙しい教授 1 人だけにつく学生さんが多くなり、一子相伝的な徹底したマンツーマン指導を受けられない学生さんを気の毒に感じている。さらに最近の地方大では、大学改革などにより、実験系にもかかわらず、学術や研究を通した教育を捨て、机上の学問を重視する学部教育となってきているように見える。山形大学農学部においては、それに呼応するように、研究重視の大学院修士課程では生命科学系においても定員割れが続き、博士課程の岩手連大進学にも影響を与えている。修士課程、博士課程の受け皿の大学の研究室が大学改革により弱体化（研究環境悪化)していることで､大学院教育は土台がゆらいでいるのではないだろうか。少なくとも生命科学系ではそのように感じる。正規分布の法則からも底辺が広い方が頂点は高くなる。地方大や岩手連大のベースアップが日本の学術の頂点を高めるはずなので、それが実現できるよう日々精進と自分に言い聞かせている。

まずは無事に 2 年間の代議員の任期を終えることができて安堵している。この 2 年間、比屋根研究科長、上村前研究科長、高橋主査ほか岩手連大のスタッフの方々、山形大の代

議員の平先生と小山先生、他の３大学の代議員の先生方にはたいへんお世話になり、厚く御礼申し上げます。

２年間の代議員を経験して

生物資源利用学連合講座　福島道広（帯広畜産大学）

２年前に岩手大学連合農学研究科の代議員を拝命したときには，連大での代議員の仕事内容についてイメージがわきませんでした．しかし最初の代議員会，点検評価委員会に出席した際，代議員の仕事の重要性を感じ生半可な気持ちでは務まらないと気を引き締められる思いが今でも思い出されます。

まず１年目は不勉強のため,教員資格審査では審査基準について改めてその規則を知り，専門委員会や専攻会議の役割などを理解することで精一杯だった思いがあります．その中でも翌年帯広で行われる科学コミュニケーションの準備のため山形大学で行われた科学コミュニケーションへの参加は，４大学間を超えた学生間の交流やあるテーマに対して協力して取り組んでいる学生たちの姿を新鮮な気持ちで見学させていただきました．それと同時に帯広でもこのようなすばらしい企画が出来るのか不安になる一面もありました．１年目の後半からは少しずつ代議員の仕事にも慣れ，また帯広開催の科学コミュニケーションに向けて３名の代議員と２名の事務官の皆さんと打合せを重ねてきました。

２年目に入り，本格的に科学コミュニケーションの準備に入り，帯広畜産大学の教育の特徴でもある実学教育をうまく取り入れることが出来ないか思案した結果，たぶんはじめての試みであるアイスクリーム・ソーセージ・製パン実習をその分野の先生方のご協力をいただき、参加した学生に好評であった？と自負しております．しかし２年目にはこれ以外にも大きな出来事があり，帯広畜産大学が岩手大学連合農学研究科から離脱する話が代議員会の中で話題になりました．当初は我々代議員も詳細は知らせられてなく戸惑う面もありましたが，第３期中期計画に向けた帯広畜産大学の方向性でもあり，他の３大学の皆様にご迷惑をおかけすることには至極恐縮する次第であります。

私はこの２年間代議員を経験して，４大学の絆さらには学生たちが他大学の教員および学生と学術的な面で活発な交流をさせていただき，このつながりは今後も大切にしていかなければならないとの思いを強く感じました．最後に２年間の前半は上村研究科長，後半は比屋根研究科長のお二人の先生にご指導をいただき感謝しております。

充実した２年間

熱・生命システム学連合講座　日　高　智（帯広畜産大学）

「岩手連大の代議員になって下さい。」と勧められたのは、帯広畜産大学畜産フィールド科学センター長の併任2年目の終わりごろ､代議員となったのは3､4年目の２年間でした。畜産フィールド科学センター長と同時期に代議員をするのは「忙しくて無理ではないですか？」とも言われましたが、同時期の代議員の先生方にたいへん恵まれて、とても充実した期間を過ごさせていただきました。きっと代議員になっていなかったら知らないことばかりだったと思います。とくに、教員の主指導・副指導の資格審査では、原著論文の点検から投稿されているジャーナルのインパクトファクターの調査まで厳密な審査が行われて

おり、審査をお願いする構成大学の先生方になにかすまない気持ちを持つほどでした。

２年目の夏、帯広畜産大学で科学コミュニケーション（合宿ゼミ）を開催いたしましたが、まだ新しい食品加工実習施設での乳製品、食肉製品の食品加工実習および製パン実験施設（十勝夢パン工房）での製パン実習が実施できたことはとても喜ばしいことでした。帯広で開催する科学コミュニケーションへの参加人数が例年より少ないと聞いた時には少しがっかりしましたが、実際に始まってみると適度な人数で、活発な議論があり、しっかりと交流ができていてとても有意義でした。私は、１日目の食肉製品の加工実習から３日目の池田ワイン城見学の最後まで 580 枚余りの写真を撮影させていただいて、データとして参加されたみなさんに配布できたことは、実施記録として良かったと思っています。

最後に残念なことは、帯広畜産大学が第 3 期中期目標期間に岩手連大の離脱を含む大学院の再編構想を進めていることです。平成 28 年 2 月現在、岩手連大には帯広畜産大学の教員 56 名が所属しており、多くの大学院生を指導しております。他の構成大学の先生方と一緒に指導できることによって、より視野が広がり、研究も深まることが多々ありました。同じ専門分野でも、視点が異なることによって、同じ山を登るにしても多くのルートがあるように違う発見や思考が育てられると思います。同じ分野の他大学との連携は今後より重要になり、グローバル化と同様に研究プロジェクトを複数の大学間でできれば素晴らしいと思います。

2 年間、至らぬ点ばかりでお世話になり本当にありがとうございました。

大学院生の指導と代議員会

地域資源経済学連合講座　佐藤和憲（岩手大学）

ある先生から連合大学院の代議員になって頂けないかと言われた時、ハッキリいって何のことかよく分かりませんでした。翌年度から連大・大学院生を担当することになっていたのですが、大学教員になって２年目でしたので、大学の運営方法について十分理解できておらず、ましてや連大についてはほとんど無知といってよい状態でした。

このような状態のまま、一昨年の春、代議員就任と同時に院生指導に取り組むことになりました。私の場合、調査研究が主体で出張が多いこともあり、２年間に１３回開催された代議員会に出席するだけで、かなりの負担であったのは事実です。弘前での代議員会には、東京から直接向かったため弘前到着が夜遅くなり、残念ながら懇親会には出席できませんでした。

しかし、代議員の経験は院生指導にとってはプラスの面が多かったと思います。まず連大事務局の皆さんと顔見知りになり、事務手続きなどについて丁寧に教えて頂けました。また大学教員として長い経験を積んでこられた代議員の先生方からは、院生の指導方法や生活上の問題についても何かとご教示頂けることが多々ありました。特に入学から、受講、研究、論文執筆、進捗状況検討、学位論文の作成と審査に至る大学院教育のプロセスについては、代議員会で毎回のように議題となっていたことから、どうにか流れを掴むことができたのだと思います。

また代議員会で印象的だったのは、大学も専門分野も異なる先生方の集まりでありながら、全般に議論が極めて活発に行われたことです。なかでも資格審査基準と予算配分方法については、建前だけでなく本音の議論ができたのではと考えております。これは代議員の人数が比較的少ないためか、それとも議論をリードする論客の先生が揃っていたためで

しょうか。

何れにしても経験の浅い私を支えて頂いた比屋根先生と築城先生及び代議員の諸先生方に大変お世話になったことを感謝し結びといたします。

帯広の屋台とわんこそば

地域環境工学連合講座　倉島栄一（岩手大学）

不心得モノといいますか、自分の所属をも把握しているとはいい難いなか、どこかで決められたと思われる世の順番にしたがい、代議員をお引き受けし、早くも２年が経過しました。当初、あまり実務を伴わないと想像していましたが、楽観に反して、資格に関すること、学生さんの顕彰のことなど、次々に慣れない仕事が舞い込んできました。自分の分野以外は、意外と知らないもの。私などその最たるものでしたが、多くの勉強をさせていただきました。ここでの作業は、必然的に評価やら審査やらで、私個人としては、関わりたくないものでしたが、研究成果の公表の手段が、年を追って多様化していることを実感しました。これを、どのように客観性を保持しながら評価するのか、今後、いっそう難しくなるような感があります。

数日前、古いスマホのなかから、今となっては懐かしい写真を取り出しました。2014 年 10 月 9 日から 10 月 10 日にかけたもので、中でも当時の連大事務室長、S々木 K 則さんが、往路の花巻空港、途中下車の南千歳、そして帯広駅、帯広畜産大学構内と、写っていました。いや、私が写したのでしょうが、どの表情も満面の笑みでした。一方の私は、はじめて訪問する街で行き場もなく、1 人で屋台村に出かけました。知らない街で飲んだくれるわけにもいかず、中途半端に前泊の１夜を過ごし、その後は帯広畜産大学のみなさんの心づかいに感謝しつつ帰路につきました。そして昨年の新年１回目の代議員会はインフルエンザでダウン、今年の１月８日、花巻で開催の生工研経由の代議員会では、昼食で、わんこそばを食しました。岩手に住んで、通算、40 年になろうとしています。わんこそばを食べたことがないことが自慢でしたが、とうとう禁を破ってしまいました。思えば楽しかった２年間でした。

この稿が、おそらく代議員最後のお仕事かと思います。この間、連大事務室のみなさんの行き届いたお気遣い感謝いたします。

代議員を経験して

地域環境管理学連合講座　小山浩正（山形大学）

連大代議員の使命は学生さんのスムースな博士取得のためのサポートとルール作りですが、それだけだと私のようにそもそも社会からのドクター取得の要請がそれほど高くない分野の教員としては代議員になるモチベーションはそれほどありません。

しかし、実際になってみると、代議委員どうしの交流を通して、他の大学や分野の様子も知ることとなり、意外にも得るものが大きい機会でした。後半は健康上の理由で役に立たず、ご迷惑をおかけしましたが、思い出深い２年間となりました。